

南原遺跡 XIV

埋蔵文化財発掘調査報告書

2024

埼玉県戸田市教育委員会



1 第2号周溝状遺構 出土土器（第16図1・2）



2 第2号周溝状遺構遺物出土状況（北西から）

はじめに

埼玉県南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口14万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の急激な変化とともに社会的、文化的な環境も急速に変わってきておりますが、古来より受け継がれてきた伝統や文化を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護及び活用が求められています。

今回報告いたします南原遺跡第14次発掘調査は、集合住宅建設に伴い令和5年に緊急発掘調査が行われたものです。

この発掘調査により、古墳時代から平安時代に生活を営んだ人たちが遺した貴重な資料を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を得ることができ、地域の遺跡の性格の一端を明らかにすることができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、御尽力、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和6年1月

戸田市教育委員会
教育長 戸ヶ崎 勤

例 言

1. 本書は埼玉県戸田市南町 2297 番 3 に所在する南原遺跡第 14 次発掘調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は事業者による集合住宅建設に伴う緊急発掘調査として、埼玉県戸田市教育委員会（担当者：今井源吾、以下「市教委」とする）が株式会社中野技術の支援を受けて実施した。また、整理作業及び報告書作成作業は、市教委が株式会社中野技術の支援を受けて実施した。
3. 発掘調査は、令和 5 年 3 月 27 日から令和 5 年 5 月 2 日まで行い、整理作業・報告書作成作業は令和 5 年 5 月 8 日から令和 6 年 1 月 26 日まで株式会社中野技術で実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの事業費は、全て事業者の負担による。
5. 本書は市教委が刊行した。
6. 本書は、今井源吾が監修した。編集は根本靖（株式会社中野技術）が行った。執筆は第 1 章第 2 節、第 2 章第 4・5 節、第 3・4 章、遺物観察表は根本靖が、その他は今井源吾が行った。
7. 発掘現場での記録写真と出土遺物の撮影は株式会社中野技術が行った。
8. 本書の著作権は、市教委が保有する。発掘調査成果の周知、活用、学術研究、教育等を目的とする場合は、本書の一部を無償で複製し、利用できるものとする。
9. 出土遺物及び発掘調査の各種データ等は全て市教委が保管し、活用を図るものとする。
10. 本事業は以下の組織により実施した。

【埼玉県戸田市教育委員会】

教 育 長 戸ヶ崎勤
教 育 部 長 川和田亨（令和 5 年 4 月 1 日から）
 山上睦只（令和 5 年 3 月 31 日まで）
教 育 部 次 長 梶山 浩（令和 5 年 4 月 1 日から）
 川和田亨（令和 5 年 3 月 31 日まで）
生涯学習課長 高屋勝利
生涯学習課主幹 本橋 洋
生涯学習課主事 金子遥奈
生涯学習課主事 今井源吾（発掘調査・出土品整理・報告書作成担当者）

【株式会社中野技術】

調査員 根本 靖 調査員補 久保田創大 測量員 高橋貴子

発掘調査参加者及び整理作業参加者

青木利恵 明石ちとせ 石川まゆみ 石橋佳奈 井上麻美子 植村智美 白井 孝 加藤洋子
辛島美樹雄 神田康一 北根麻由 北原和一 木村圭介 久津輪弘樹 越村 篤 下岡孝明
鈴木彩乃 高橋遥香 高橋広幸 千葉真人 手塚哲也 萩原和彦 福泉 藍 藤江保明 藤澤朋広
松尾貴弘 松田伸行 黛 大樹 宮澤洋美 山本圭子 渡部正雄

11. 本書の作成にあたり、次の方々・機関に御指導、御助言、御協力を賜った。記して感謝申し上げます。

株式会社山福不動産 積水ハウス不動産東京株式会社

凡 例

1. 挿図中の地図、検出遺構トレース図等の方位は、図中に座標北の方位を示した。
2. 本書の国家座標、緯度、経度は、世界測地系 2011 に則している。
3. 遺構番号は調査の進捗過程で、遺構のプランが確認された順に種別ごとに付した。遺構略号は以下の通りである。

S I : 竪穴建物跡 S X : 周溝状遺構 S Y : 溝状遺構
S K : 土坑 S P : ピット P : 遺構内ピット

4. 発掘調査時の土層観察における色調や遺物観察における色調は、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 2016 年版、日本色研事業株式会社発行）に準じ、明暗や濃淡などの記録は、記録者の主観に基づいている。
5. 遺物拓影図は、向かって右側に内面、左側に外面を示した。ただし、外面のみの場合には、向かって左側に示した。また、底面は下位に、天井面は上位に示した。
6. 遺物の種別の内、古墳時代前期初頭から平安時代に属する土器（須恵器・陶器を除く）は、全て「土師器」と表記した。
7. 遺物実測図の内、須恵器は断面を黒塗りにし、その他の土器については断面を白抜きにした。
8. 遺構図・遺物実測図のトーンは次の通りである。
赤彩： 黒斑：
9. 遺構実測図および遺物実測図の縮尺はすべて挿図中に示した。
10. 写真図版の縮尺は任意である。
11. 標高は、T. P（東京湾中等潮位）を基準とした。
12. 遺物観察表の法量値の（ ）は復元推定値、〈 〉は残存値を示す。
13. 出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例： MH. 14. S I - 1. 1

遺跡略号 調査次 遺構種別 遺構番号 遺物番号

遺構一括遺物は、区域を設定したものは区域名を、それ以外は遺構番号までとし、表面採集遺物や攪乱出土遺物は調査次の次に表土と記載した。

目 次

巻頭図版

はじめに

例 言／凡 例

目次／挿図目次／挿表目次／図版目次

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 発掘調査と整理作業の方法と経過…………… 2

第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境…………… 3

第2節 歴史的環境…………… 4

第3節 遺跡・調査の概要…………… 5

第4節 グリッドの設定…………… 10

第5節 地形と基本層序…………… 10

第3章 古墳時代前期の遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡…………… 13

第2節 周溝状遺構…………… 15

第4章 平安時代の遺構と遺物

第1節 溝状遺構…………… 23

第5章 時期不明の遺構と遺物

第1節 土坑…………… 30

第2節 ピット…………… 31

第6章 遺構外出土遺物…………… 33

第7章 まとめ…………… 35

写真図版

報告書抄録／奥付

挿図目次

第1図	埼玉県 of 地形 (S=1/650,000)…………… 3	第16図	第2号周溝状遺構出土遺物実測図1 (S=1/3)……………21
第2図	戸田市域 of 地形 (S=1/65,000)…………… 4	第17図	第2号周溝状遺構出土遺物実測図2 (S=1/3)……………22
第3図	南原遺跡および周辺 of 遺跡位置 (S=1/10,000)…………… 7	第18図	第1号溝状遺構実測図1 (S=1/100)……………23
第4図	南原遺跡調査区位置図 (S=1/2,500)…………… 9	第19図	第1号溝状遺構実測図2 (S=1/60・1/40)……………24
第5図	全体図 (S=1/150)……………11	第20図	第1号溝状遺構実測図3 (S=1/40)……………25
第6図	調査区等高線図 (S=1/200)……………12	第21図	第1号溝状遺構実測図4 (S=1/60・1/80・1/40)……………26
第7図	基本土層図 (S=1/40)……………12	第22図	第1号溝状遺構実測図5 (S=1/40)……………27
第8図	第1号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)…………… 13	第23図	第1号溝状遺構出土遺物実測図1 (S=1/3)……………28
第9図	第1号住居跡実測図 (S=1/40・1/60)……………14	第24図	第1号溝状遺構出土遺物実測図2 (S=1/3)……………29
第10図	第1号周溝状遺構実測図1 (S=1/60)…………… 15	第25図	第1号・第2号土坑実測図 (S=1/40)……………30
第11図	第1号周溝状遺構実測図2…………… 16	第26図	第1号～第5号ピット実測図 (S=1/40)……………32
第12図	第1号周溝状遺構出土遺物実測図 (S=1/3)……………16	第27図	遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)……………33
第13図	第2号周溝状遺構実測図1 (S=1/120・1/40)……………17		
第14図	第2号周溝状遺構実測図2 (S=1/40)……………18		
第15図	第2号周溝状遺構実測図3 (S=1/60・1/80・1/40)……………19		

挿表目次

第1表	南原遺跡周辺遺跡の概要…………… 7
第2表	第1号住居跡出土遺物観察表…………… 13
第3表	第1号周溝状遺構出土遺物観察表…………… 16
第4表	第2号周溝状遺構出土遺物観察表…………… 22
第5表	第1号溝状遺構出土遺物観察表…………… 29
第6表	遺構外出土遺物観察表…………… 33
第7表	遺構観察表…………… 34
第8表	遺物集計表……………34

図版目次

図版 1

- 1 調査区全体（上空より）

図版 2

- 1 第2号周溝状遺構遺物出土状況（南西から）
- 2 第2号周溝状遺構遺物出土状況（北西から）

図版 3

- 1 テストピット1断面
- 2 テストピット2断面
- 3 第1号竪穴建物跡完掘（南東から）
- 4 第1号竪穴建物跡貯蔵穴完掘（南から）
- 5 第1号竪穴建物跡ピット1完掘（南から）
- 6 第1号周溝状遺構完掘（上空から）
- 7 第1号周溝状遺構A断面（南から）
- 8 第1号周溝状遺構B断面（東から）

図版 4

- 1 第2号周溝状遺構（上空から）
- 2 第2号周溝状遺構F断面（北東から）
- 3 第2号周溝状遺構D断面（南西から）
- 4 第2号周溝状遺構C断面（南西から）
- 5 第2号周溝状遺構B断面（南東から）

図版 5

- 1 第2号周溝状遺構A断面（北東から）
- 2 第2号周溝状遺構E断面（北東から）
- 3 第2号周溝状遺構ピット1断面（南から）
- 4 第2号周溝状遺構ピット1完掘（南から）
- 5 第1号溝状遺構C断面（北から）
- 6 第1号溝状遺構B断面（南から）
- 7 第1号溝状遺構A断面（南から）
- 8 第1号溝状遺構D断面（南から）

図版 6

- 1 第1号溝状遺構遺物出土状況（南西から）
- 2 第1号溝状遺構遺物出土状況（東から）
- 3 第1号溝状遺構遺物出土状況（南西から）
- 4 第1号溝状遺構遺物出土状況（南東から）
- 5 第1号溝状遺構ピット1断面（南から）
- 6 第1号溝状遺構ピット1完掘（南から）
- 7 第1号溝状遺構ピット3断面（東から）
- 8 第1号溝状遺構ピット3完掘（東から）

図版 7

- 1 第1号溝状遺構ピット5断面（南西から）
- 2 第1号溝状遺構ピット5完掘（南西から）
- 3 第1号溝状遺構ピット10断面（南から）
- 4 第1号溝状遺構ピット10完掘（南東から）
- 5 第1・2号土坑断面（西から）
- 6 第1・2号土坑完掘（西から）
- 7 第1号ピット断面（南西から）
- 8 第1号ピット完掘（南西から）

図版 8

- 1 第2号ピット断面（西から）
- 2 第2号ピット完掘（西から）
- 3 第3号ピット断面（南から）
- 4 第3号ピット完掘（南から）
- 5 第4号ピット断面（南から）
- 6 第4号ピット完掘（南から）
- 7 第5号ピット断面（南東から）
- 8 第5号ピット完掘（南から）

図版 9

- 1 調査開始前（北東から）
- 2 西側調査区表土掘削（北西から）
- 3 西側調査区埋め戻し（西から）
- 4 調査風景①
- 5 東側調査区表土掘削（北から）
- 6 東側調査区埋め戻し（東から）
- 7 調査風景②
- 8 調査終了後（北東から）

図版 10

- 第1号住居跡出土遺物
- 第1号周溝状遺構出土遺物
- 第2号周溝状遺構出土遺物（1）

図版 11

- 第2号周溝状遺構出土遺物（2）
- 第1号溝状遺構出土遺物

図版 12

- 遺構外出土遺物

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

令和4年11月、事業者から戸田市教育委員会（以下、「市教委」という。）に対し、戸田市南町2297番3（地番表示）における集合住宅建設の事業計画及び埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。

市教委では、事業計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地内に所在しており、事業者に対し工事着手前に試掘確認調査を実施するように指導した。

これを受け、令和4年11月18日付で事業者から市教委に対し試掘確認調査の依頼書が提出され、試掘確認調査を実施することとなった。

試掘確認調査は、市教委が令和4年12月14日に実施した。試掘調査では、弥生時代末から古墳時代前期に帰属する溝状遺構2条、土坑2基、ピット2基が確認され、同時期に帰属するものと考えられる土器を検出した。

この調査結果に基づき、令和5年2月16日付戸教生第2093号にて埼玉県教育委員会（以下、「県教委」と略す）宛に報告し、同日付で周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲変更を行った。

今回の事業計画地について試掘調査の結果に基づき市教委と事業者間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、建物建設範囲（348㎡）については記録保存のための緊急発掘調査を行い、残りの部分（87㎡）は、現状保存を行うことで合意した。

令和5年2月24日付で事業者から文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、市教委は令和5年3月20日付戸教生第2311号にて県教委に宛て進達した。

これを受け、県教委から事業者に対し、令和5年3月20日付教文資第4-2161号で、事業計画地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

発掘調査に当たり、事業者は、市教委に対し、令和5年2月24日付で発掘調査の依頼書を提出した。また、令和5年3月9日付戸教生第2274号にて事業者、発掘調査受託者及び市教委の三者による「南原遺跡における埋蔵文化財発掘調査基本協定書」を締結した。

そして、文化財保護法第99条に基づき、市教委から県教委宛てに令和5年3月22日付戸教生第2375号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、南原遺跡第14次発掘調査を実施することとなった。

第2節 発掘調査と整理作業の方法と経過

1. 発掘作業

南原遺跡第14次調査は、令和5年3月27日から5月2日まで実施した。調査面積は348㎡である。調査は、調査区の西側を調査した後に東側を調査する方法を採用し、掘削で生じた排土を調査区の未掘削範囲に仮置きし、砂塵防止シートを掛けて保管した。

3月27日に西側調査区を設定して重機を用いた表土掘削を開始するとともに、発掘調査機材の搬入を行った。表土掘削は南西隅から着手した。3月29日からは人力による遺構確認を開始した。3月30日に、遺構検出状況の空撮をドローンにて実施し、電子平板により図面作成を行った。なお、発掘調査での写真撮影は、全てデジタル一眼レフカメラ Nikon D750 を使用し、JPEG、及び RAW 形式にて撮影した。3月31日から検出された遺構に番号付与と土層観察ベルトを設定し、遺構掘削を開始した。4月3日から12日まで遺構掘削と遺構平面図、土層断面図作成、出土遺物の取り上げを行った。平面図、及び出土遺物の取り上げは電子平板で実施した。4月13日にドローンで遺構完掘の空撮を行い西側調査区の調査を終了し、4月14日に重機による埋め戻しと整地を実施した。

東側調査区は、4月18日より重機による表土掘削と同時に人力によるプラン確認を行い、19日に攪乱と遺構プランの測量を行い、遺構番号付与と土層観察ベルトを設定し、遺構掘削を開始した。4月21日からはテストピットの掘削を開始し、4月27日まで遺構掘削、土層断面図作成、出土遺物の取り上げを行った。4月28日に調査区の遺構完掘をドローンによる空撮と、電子平板による測量を実施し調査を終了した。5月1日に東側調査区の埋め戻しと整地を開始し、5月2日に機材撤収、重機搬出により全ての現場作業を完了した。

2. 整理作業

当該調査にかかる出土品及び図面類の整理作業、報告書作成は令和5年5月8日から令和6年1月26日まで株式会社中野技術にて実施した。

発掘現場からの出土遺物は、洗浄・註記・接合を行った。7月10日に報告書掲載遺物の抽出を行い、実測図作成・拓影採取を行った。拓影はスキャナでコンピュータに取り込んだ後、Adobe Photoshopにて修正し、デジタルデータ化した。遺物実測図、土層断面図等の図面類もスキャナで取り込み、デジタルデータ化した。遺構平面図はCADソフトデータを Adobe Illustrator データに変換した。これらの各種図面データは、Adobe Illustratorにてデジタルトレースを行った。遺物写真は、Nikon D850を使用してRAW形式で撮影し、Adobe Photoshopにて加工したあとに Adobe Illustrator でレイアウトした。また、「巻頭図版1 第2号周溝状遺構出土土器」は、RAW形式で撮影した遺物を切り抜き処理し、Adobe Photoshopの機能「Generative Fill（生成塗りつぶし）」（Adobe社独自の画像生成AI「Adobe Firefly」）を使用して背景を生成した。背景のみに画像生成AIを適用したので遺物そのものの形状変化や微妙な質感の損失などは生じていない。版下は、Adobe Illustrator、Adobe InDesignを用いて作成し、PDFファイル形式で入稿した。

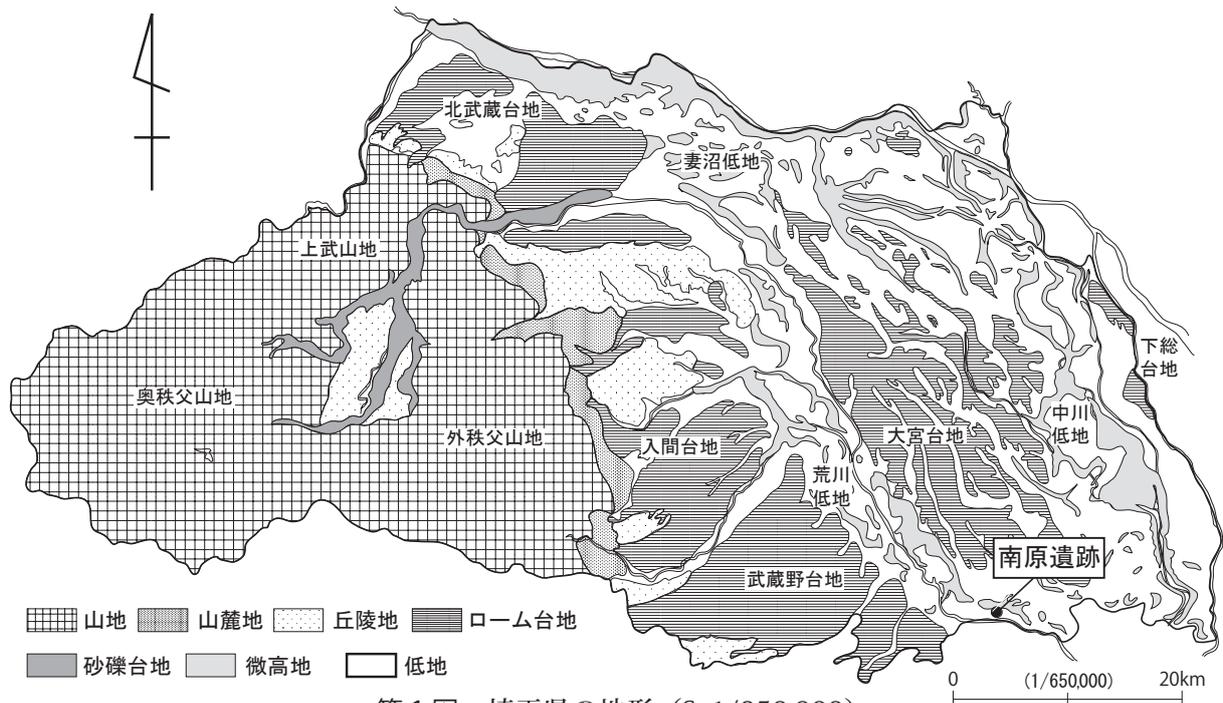
第2章 周辺環境と遺跡・調査の概要

第1節 地理的環境

南原遺跡が所在する戸田市は、埼玉県南東部に位置し、東西約 6.0km、南北約 3.0km、面積 18.17 km²の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市と川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市と和光市、南の東京都板橋区と北区には荒川を隔てて接している。市域には国道 17 号線(中山道)や新大宮バイパスが南北に走り、また首都高速 5 号線や東京外かく環状道路、JR 埼京線の開通により、交通の利便性が高まり急激な市街地化が進んでいる。また、都心に近い立地のため、工場や流通センターなども数多く所在する。

戸田市の地形は、埼玉県西部の山地に端を発する荒川によって形成された平坦な沖積低地(荒川低地)が全域を占める。荒川は氾濫や流路の変更によって、市域の中央部を西から東にかけて自然堤防を形成している。この自然堤防は荒川旧河道に沿うように発達し、戸田市域では美女木から笹目を通り、本町、上戸田を抜けて川口市へと断続的に延びている。

南原遺跡は、JR 埼京線戸田公園駅から南西約 500 mの戸田市南町を中心に広がる遺跡である。遺跡の南側には戸田漕艇場が所在し、その約 500 m南には荒川が東流する。遺跡周辺は、昔から「高知(たかち)原(ばら)」と呼ばれ、遺跡の所在が確認された当時は戸田市域の中でも比較的起伏の見られる高所であったと言われている。遺跡の北側には、治水のために掘られた菖蒲川が東流するが、この周辺にはかつて「菖蒲(しょうぶ)沼(ぬま)」と呼ばれた低湿地が広がっていた。この低湿地は長年に渡り水田として利用されていたが、現在は土地区画整理に伴う埋め立てや整地が行われ、倉庫や工場、住宅などが立ち並ぶ平坦な市街地となっている。



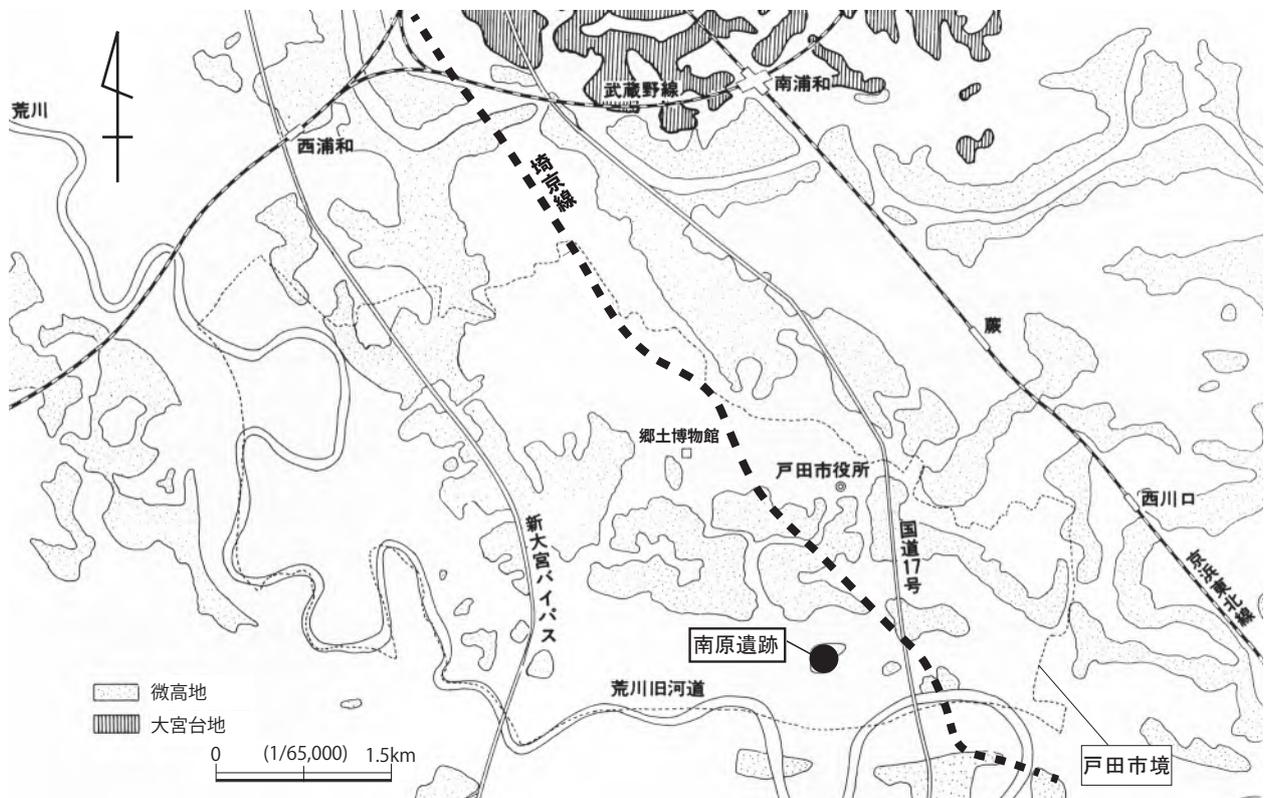
第1図 埼玉県の地形 (S=1/650,000)

第2節 歴史的環境

戸田市では、現在までのところ旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代に帰属する遺跡も確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が検出されている。前期では、堤外から前期後葉諸磯a式の破片資料1点が出土しており、本町からは前期末のほぼ完形の十三菩提式深鉢形土器が出土している。また、戸田市文化会館の建設中に、含礫砂層から縄文時代前期から中期の頃の化石人骨が見つかった。人骨の周囲には丸木舟と見られる木屑なども見つかり、この時期の戸田市域が海進の影響を受けていたことが分かる。中期は、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡や南原遺跡などで勝坂式・阿玉台式や加曾利E式期の土器片が検出されている。後期は、鍛冶谷・新田口遺跡では、堀之内式、加曾利B式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器片が出土している。

縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭になると、市域内の微高地上に遺跡が形成されるようになる。

弥生時代後期後半から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡及び根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも昭和51年(1976)に埼玉県選定重要遺跡に選定された鍛冶谷・新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓(周溝状遺構)群や集落跡、木器の出土などから全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、第2次及び第3次調査では、環濠と思われる溝状遺構と溝の東部に密集する竪穴建物跡群を検出していることから、上戸田本村遺跡周辺が当該期の環濠集落であった可能性が高い。



第2図 戸田市域の地形 (S=1/65,000)

古墳時代中期では南原遺跡と上戸田本村遺跡で遺構・遺物が検出されている。第2次調査B区で竪穴建物跡3軒、第9次調査で井戸跡1基、第10次調査で竪穴建物跡1軒と土坑2基が確認され、上戸田本村遺跡第3次調査で溝状遺構から同時期の土器が多量に出土している。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内には、「くまん塚」と呼ばれた円墳が所在し、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀2振が出土している。また、上戸田本村遺跡では鬼高期の竪穴建物跡2軒、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基検出されている。南原遺跡では、第1次調査で人物埴輪、円筒埴輪等が出土した円墳1基、第2次調査A区で円形周溝墓（円墳）1基、第3次調査D区で鬼高式期の竪穴建物跡1軒と屋外竈1基、第4次調査で円形周溝墓（円墳）2基、6次調査で円形周溝墓（円墳）1基、第8・9次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝が2基検出されている。第12次調査では、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が1基検出されている。

平安時代は、南原遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、柵列跡、畝状遺構が検出されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部がかつて佐々目郷に当たり、鎌倉時代から戦国時代にかけて鶴岡八幡宮の社領であった。当該期は、大前遺跡や前谷遺跡、南原遺跡、南町遺跡及び美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡などが検出されている。

近世は、市の大半の村が幕府の直轄領となり、徳川家の鷹場として使用されていた。また、五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡る「戸田の渡し」が板橋宿と蕨宿を結ぶ交通の要所として機能していた。当該期は鍛冶谷・新田口遺跡、南原遺跡及び前谷遺跡で溝状遺構や井戸跡が、美女木八幡社脇遺跡では美女木八幡社を廻っていた堀の跡が検出されている。

第3節 遺跡・調査の概要

南原遺跡は、本調査を含めてこれまでに14回に渡る発掘調査が行われ、弥生時代後期後半から近世に渡る複合遺跡であることがわかっている。この中でも遺跡が形成された中心時期は、弥生時代後期後半から古墳時代前期、古墳時代後期の2つの時期である。特に、古墳時代後期では遺跡の西側に群集墳が築造され、小規模な円墳が合計8基検出されている。

第1次調査は、倉庫建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が昭和44年8月26日から9月4日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代後期の古墳周溝1基（南原1号墳）、中世の溝跡2条を検出した。周溝状遺構からは底部穿孔がなされた壺形土器などが出土しており、「攪乱」と報告がなされているが周溝内側に楕円形の窪みが確認されている。また、古墳周溝からは、鴻巣市生出塚埴輪窯で製作されたものと考えられる人物埴輪や靴形埴輪、円筒埴輪が出土し、戸田市における初めての埴輪出土事例として近隣住民の注目を集めた。

第2次調査は、戸田市教育委員会が昭和45年7月25日から8月5日までの期間で実施した。調

査区は、第1次調査区の南方を拡張したA区、第1次調査区の南東にB区の2区が設定された。A区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構4基、竪穴建物5軒、第1次調査で検出した古墳周溝の続きを含め古墳周溝2基が検出された。竪穴建物5軒のうち2軒からは炭化材や焼土が広範囲から検出されているため、焼失住居であった可能性が考えられている。第1次調査で検出した古墳周溝（南原1号墳）の延長部からの遺物の出土はなかったが、第1号円形周溝墓（南原2号墳）からは鬼高式期の甕形土器が覆土中から2点、周溝周辺からは管玉1点と赤彩された土師器坏が並べて設置された状態で2点出土した。B区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代中期の竪穴建物3軒が検出された。竪穴建物からは和泉式期の台付甕形土器、高環形土器が出土している。なお、2次調査B区は第8次調査、第9次調査において再調査が行われている。

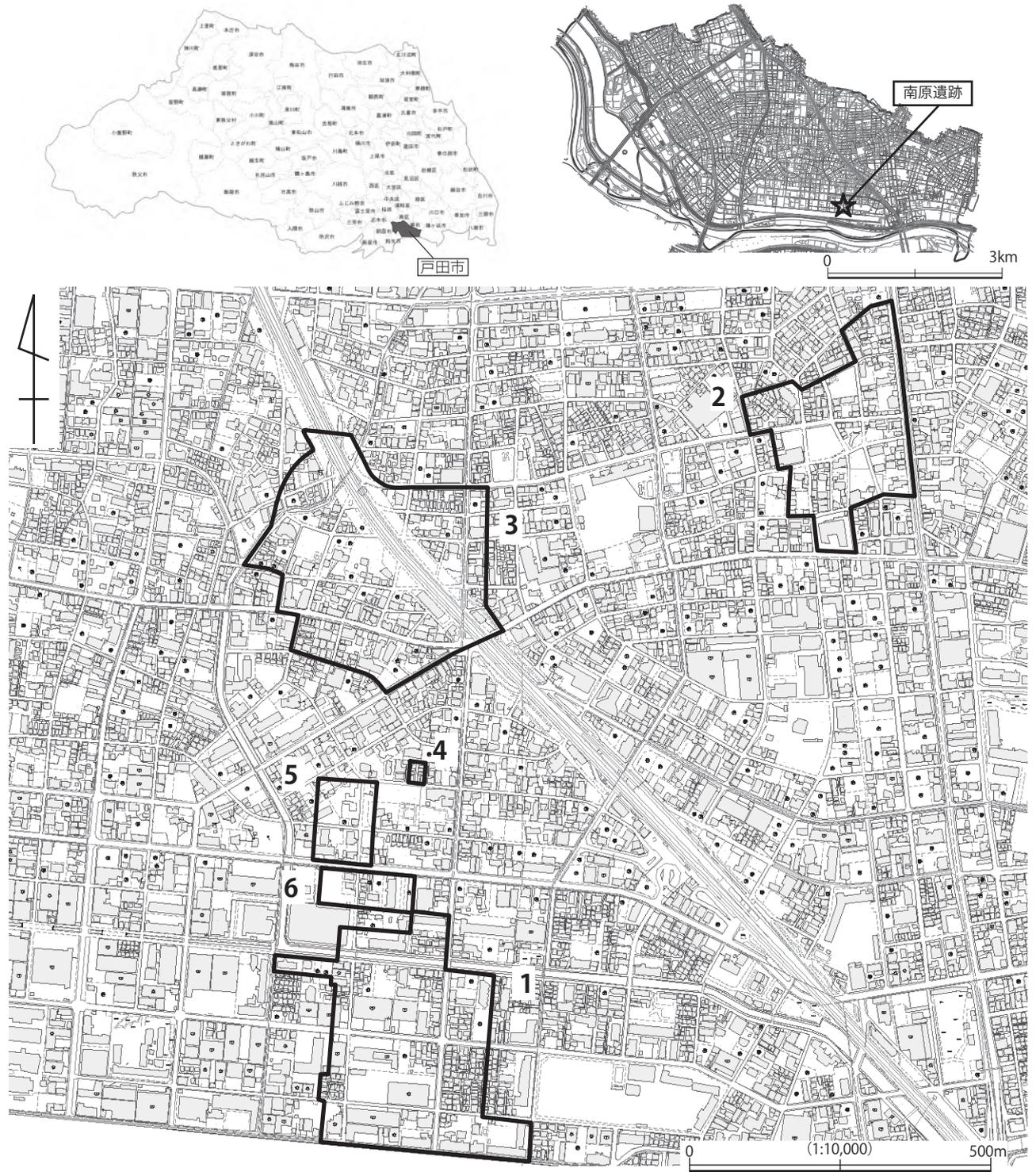
第3次調査は、下水道工事事務所の資材置場建設工事に伴う緊急発掘調査としてD区、今後の宅地化に先立つ事前調査としてE区の2区に渡り、戸田市教育委員会が昭和47年2月14日から2月23日までの期間で実施した。D区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、古墳時代後期の竈をもつ竪穴建物1軒と屋外竈1基を検出した。周溝状遺構からは小型埴形土器や頸部に凸帯を有する壺形土器などが出土している。また、竪穴建物、屋外竈からは土師器坏や鞆羽口が出土している。E区からは、ピット列3列と土坑23基が検出された。これらの遺構の性格は不明であるが、第3・4・16・17号土坑からは平安時代の須恵器坏が出土している。

第4次調査は、昭和47年に戸田市教育委員会によって実施された。調査区からは古墳周溝2基（南原3号墳・4号墳）と薬研堀の溝跡1条が検出された。

第5次調査は、平成元年6月26日から9月7日までの期間で、戸田市遺跡調査会が実施した。調査区からは、古墳時代前期の竪穴建物11軒、土坑1基、周溝状遺構の可能性のある溝跡1条、中世の堀跡3条、その他時期不明の土坑1基、井戸跡1基、溝跡5条、ピット群3群を検出した。竪穴建物11軒のうち3軒からは、床面から多量の炭化物が検出されているため、焼失住居であった可能性が考えられている。また、周溝状遺構の可能性のある溝跡からはガラス小玉が出土している。中世の堀跡は薬研状の断面形状を呈する。常滑産の甕や東播産の甕・壺などが出土していることから、13世紀後半から14世紀に帰属するものであると考えられている。

第6次調査は、倉庫建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市遺跡調査会が平成4年6月24日から8月24日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構1基、竪穴建物8軒、古墳時代後期の古墳周溝1基（南原5号墳）、中世の溝跡1条、堀跡2条が検出された。検出された竪穴建物のうち、3軒は焼失住居である。第2号住居からは赤彩された小型埴形土器が4点出土しており、第3号住居からは頸部に凸帯を有する壺形土器が出土している。また、古墳周溝からは1,200点以上の土器片が大量に出土した。

第7次調査は、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市遺跡調査会が平成15年11月10日から平成15年12月30日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の竪穴建物11軒、溝跡8条、土坑3基、井戸跡2基を検出した。また、これらの遺構に伴い、土師器、須恵器、ロクロ土師器、陶器が出土した。竪穴建物の大半は、それぞれ重複して形成されており、居住域として長時間機能していた可能性が指摘できる。



第3図 南原遺跡および周辺の遺跡位置 (S=1/10,000)

第1表 南原遺跡周辺遺跡の概要

No.	遺跡名	所在地	種別	主な時代	立地
1	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前／中／後期・平安・鎌倉～戦国・近世	微高地
2	前谷遺跡	戸田市上戸田2丁目	集落跡・城館跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉～戦国・近世	微高地
3	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田3・5丁目、本町3丁目、大字新曽	集落跡	弥生後期・古墳前期・近世	微高地
4	大前遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡	古墳前期・平安・鎌倉～戦国	微高地
5	上戸田本村遺跡	戸田市本町3丁目	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前／後期	微高地
6	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉～戦国	微高地

第8次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成20年3月28日から同年7月31日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物80軒以上、周溝状遺構8基以上、古墳時代後期の古墳周溝2基などが検出された。このうち、SZ1（南原7号墳）からは人物埴輪、馬形埴輪、円筒埴輪が出土しており、資料の一部を報告している。

第9次調査は、工場建設に伴う緊急発掘調査として、大成エンジニアリング株式会社が平成21年7月6日から9月30日までの期間で実施した。調査区からは、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴建物28軒、周溝状遺構13基、古墳時代前期から中期の溝跡13条、井戸跡3基、古墳時代後期の古墳周溝2基、中世以降の溝跡4条などが検出された。古墳周溝は、8次調査で検出した古墳周溝2基の続き部分が検出され、1号墳（南原6号墳）からは須恵器模倣坏や壺形土器、2号墳（南原7号墳）からは人物埴輪、馬形埴輪（8次調査出土資料と同一個体）、家形埴輪、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土した。

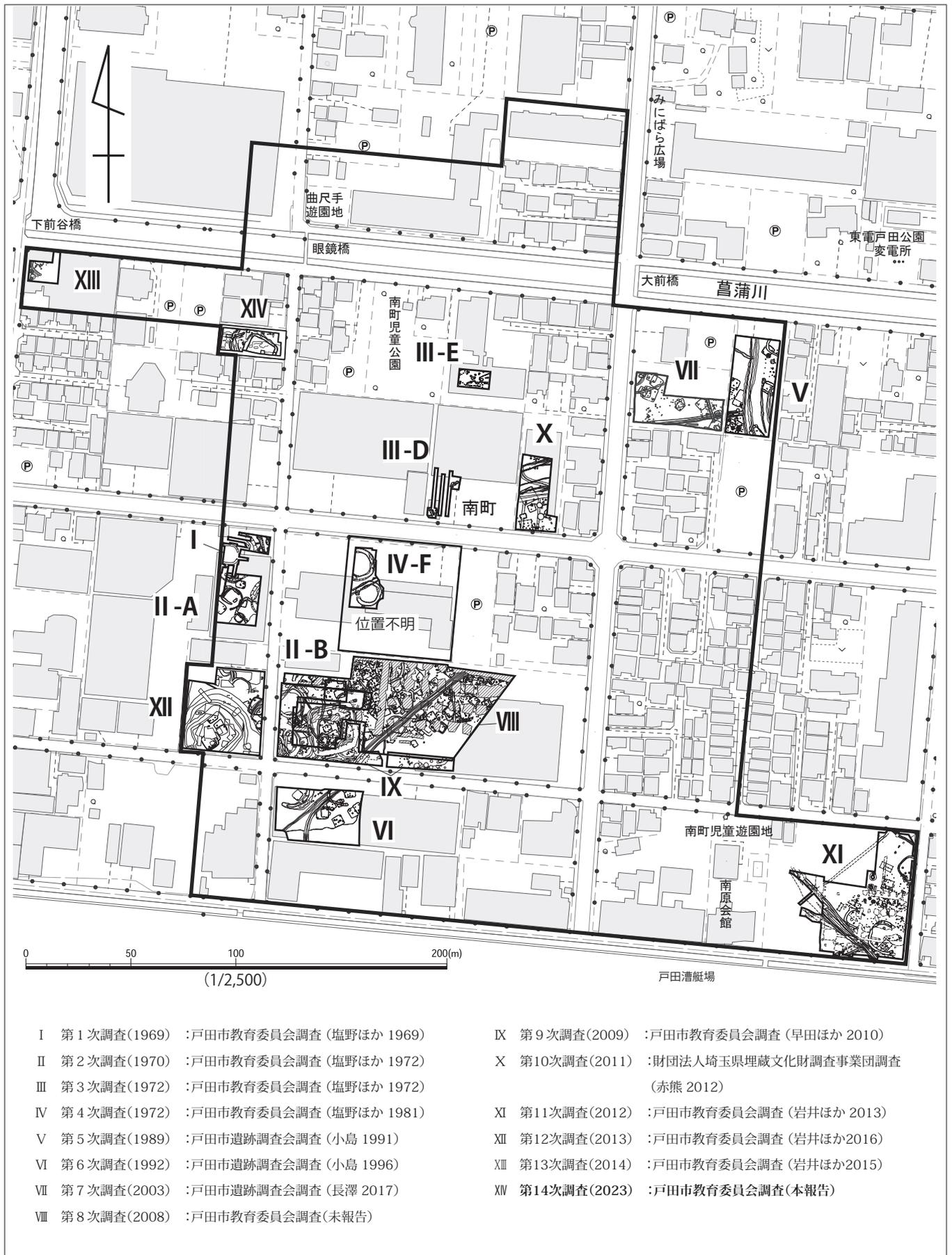
第10次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が平成23年10月1日から11月30日までの期間で実施した。調査区からは古墳時代中期の竪穴建物1軒、土坑2基、平安時代の竪穴建物2軒、土坑3基、溝跡1条、中近世の掘立柱建物跡1棟、土坑3基、井戸跡5基、溝跡10条、ピット66基が検出された。古墳時代中期の竪穴建物では、壁溝周辺からまとめて高坏形土器が6点出土した。また、平安時代の竪穴建物、土坑からは9世紀前半の須恵器が出土した。

第11次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成24年9月3日から10月31日までの期間で実施した。調査区からは弥生時代後期から古墳時代前期の周溝状遺構3基、溝跡1条、平安時代から中世の掘立柱建物跡6棟、柵列跡4列、井戸跡8基、溝跡6条、土坑31基、ピット273基、近世以降の溝跡2条を検出した。出土遺物は少なかったが、検出された周溝状遺構3基は全てが南東方向に開口部を持つなどの規則性を有している。また、井戸跡からは、13世紀から14世紀を中心とした常滑産の陶器や中国磁器などが出土した。

第12次調査は、宅地造成および戸建分譲住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成25年4月2日から6月29日までの期間で実施した。調査区からは古墳時代前期の竪穴建物8軒、溝跡6条、土坑2基、方形周溝墓1基、古墳時代後期の円墳1基、平安時代の溝跡5条、火葬墓1基を検出した。古墳時代前期の方形周溝墓からは土器が集中的に出土し、また、同遺構より緑色凝灰岩製の勾玉も1点出土している。古墳時代後期の円墳である第1号墳（南原8号墳）からは、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土している。

第13次調査は、共同住宅建設事業に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が平成24年9月3日から10月31日までの期間で実施した。調査区からは、古墳時代前期の竪穴建物4軒、周溝状遺構3基、ピット6基を検出した。第1号住居跡は焼失住居であり、大型の炭化材が放射状に倒れ込んだ状態で検出された。

本調査は、第14回目の調査となる。集合住宅建設に伴う緊急発掘調査として、戸田市教育委員会が令和5年3月27日から5月2日までの期間で実施した。調査区からは古墳時代前期の竪穴建物1軒、周溝状遺構2基、平安時代の溝跡1条、時期不明の土坑2基、ピット5基を検出した。遺構に伴って、土師器、須恵器、ロクロ土師器、陶器が出土した。



第4図 南原遺跡調査区位置図 (S=1/2,500)

第4節 グリッドの設定

調査では世界測地系に準拠した経緯上に5 m 正方のグリッドを設定した(第5図)。グリッドの呼称については過去の報告書に従い、北西隅を基点に、東西方向をアルファベット、南北方向にアラビア数字を付し、「A 1」のように表記した。

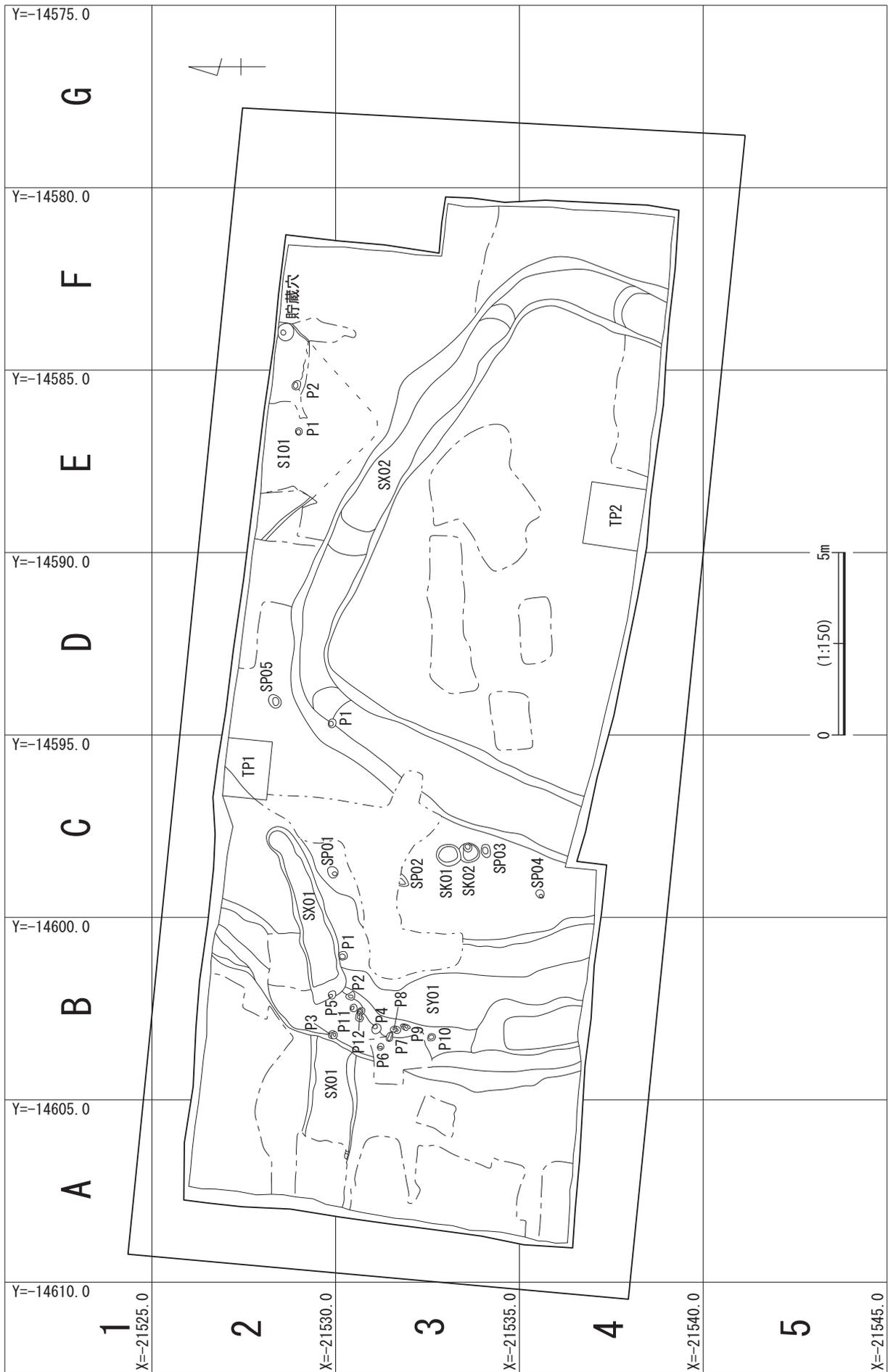
第5節 地形と基本層序

今回の調査区は、現地表面から平均1～1.2 m(場所によってはそれ以上)まで既存建築物の建設と解体が原因と思われる掘削と埋め戻しにより攪乱されていた。このため、調査区の殆どで自然堆積層が消失していたため、遺構確認面は攪乱を除去した直下の黄褐色(10YR5/6・10YR5/8)シルト質土の上面とした。調査区内において遺構確認面が、多少の凹凸はあるもののおよそ標高2.3 mの平坦であるのは攪乱による結果である。

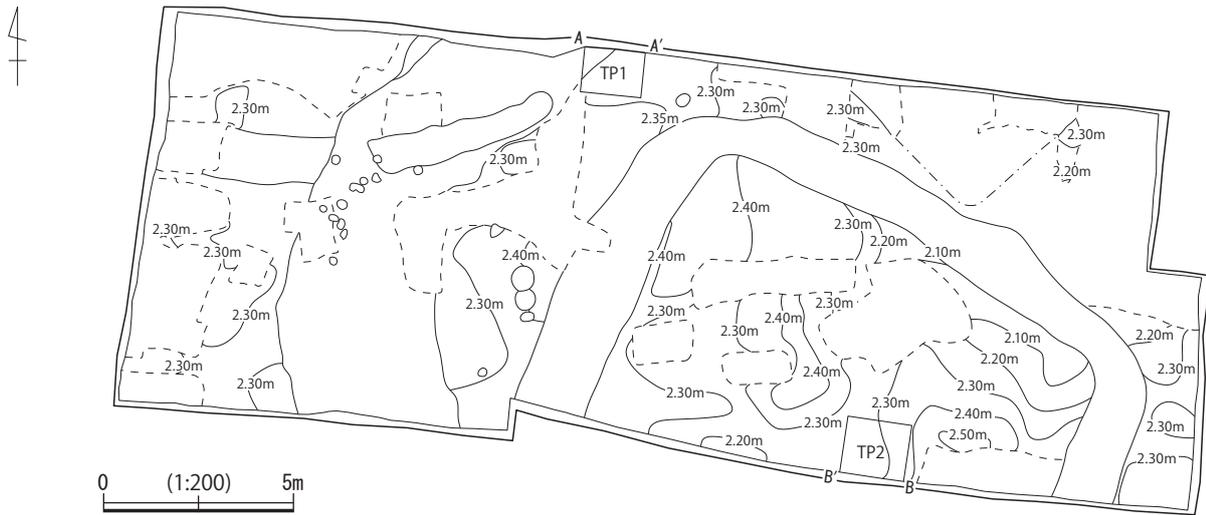
本遺跡は、沖積低地の微高地に立地し、北側には「菖蒲川」が東流している。微高地の堆積土は砂質あるいはシルト・粘土質が主体とされる。調査区内の堆積土を確認するため南北壁の2箇所にテストピット(以下TPと呼称する)を設定し基本層序を確認した。

北壁のTP1(第6・7図 図版3-1)は、地表面から深さ2.12 mまでの堆積層を7層に分層した。①層は攪乱層である。1層は黄褐色シルト質土層で遺構確認面とした。2、3層はにぶい黄褐色土層で3層は砂質を呈する。4層は砂質の褐灰色土が厚く堆積する。5、6層は灰黄褐色土で5層がやや粘性を持つ。最下層の7層は砂質のにぶい黄橙色土層である。

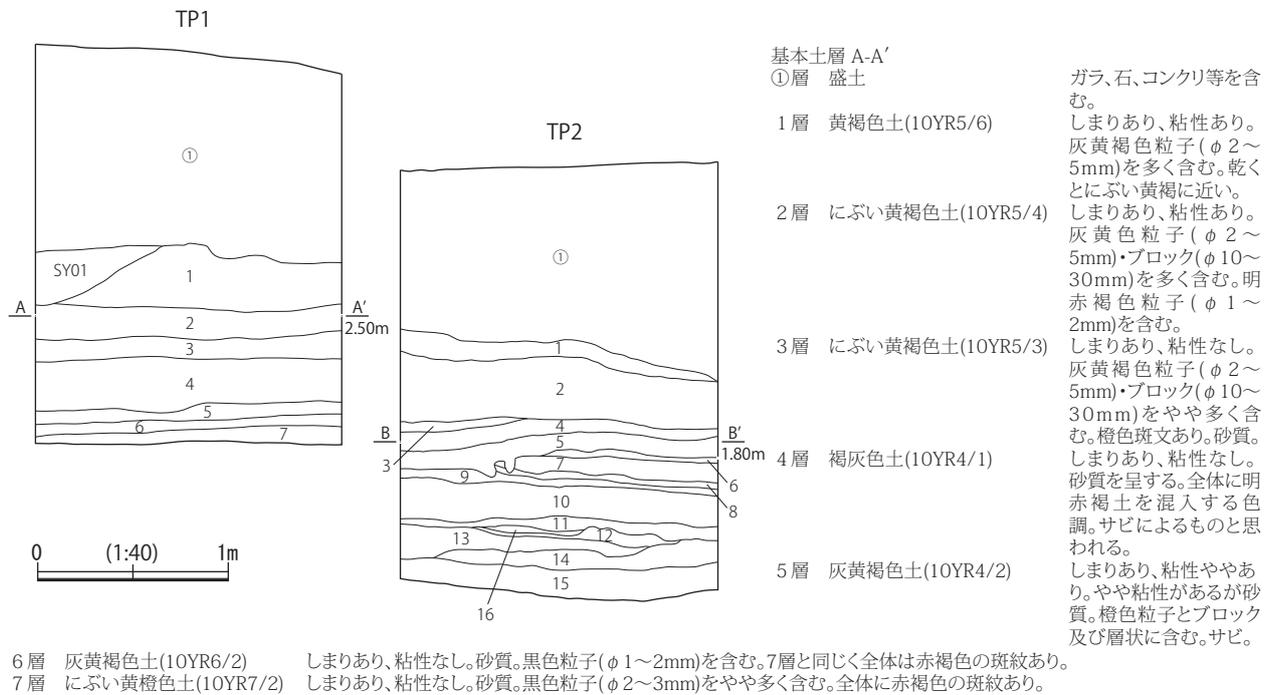
南壁のTP2(第6・7図 図版3-2)は、地表面から深さ2.3 mまでの堆積層を16層に分層した。1、2層はTP1の3層と同一であるが、2層以下のにぶい黄褐色土と灰黄褐色土が交互に堆積する層序はTP1ではみられない。しかしながら色調や粘性、砂質度合いなどからTP1の5層から7層と、TP2の8層から10層が同様の層位として対応すると考えられる。なお、両TPともに下層に行くほど赤褐色(5YR4/6)や橙色(2.5YR6/8)のブロックや線状をなす酸化鉄の斑紋が多くみられた。近接した場所での基本堆積層序の違いは微高地の堆積土壌形成が複雑であることを示していると考えられる。



第5図 全体図 (S=1/150)



第6図 調査区等高線図 (S=1/200)



第7図 基本土層図 (S=1/40)

第3章 古墳時代前期の遺構と遺物

第1節 竪穴建物跡

第1号竪穴建物跡-SI01

遺構 (第9図 第7表 図版3-3~5)

位置：E2・F2グリッド。北側は調査区外に続いている。重複関係：なし。遺構の中央部から南側は攪乱により消失している。平面形・規模：長軸4.3m、短軸3.86mを測る。床面が遺構確認面とほぼ同一の深さで検出されたが、北壁断面観察からは一部に0.18mの覆土を確認できた。平面形状は南東から北西に広がる隅丸方形を呈すると推定される。主軸方位：N-41°-Wと考えられる。覆土：黒色土で、にぶい黄褐色粒子と赤褐色粒子を含む。床面は層厚0.04mの黒褐色土のにぶい黄褐色粒子やブロックを多く含み、一部に硬化面が検出されたことから、貼床と考えられる。

掘り方：中央を掘り残して壁際を幅0.2m、深さ0.17mの溝状に掘りくぼめていた。

附属施設：ピット2基と貯蔵穴を検出した。P1は径0.2mで、床面から深さ0.21mを測り、主柱穴と考えられる。P2は長軸0.27m、短軸0.23mの円形であり、床面から深さ0.1mを測る。貯蔵穴は北東の壁際に位置し、平面形状は長軸0.49m、短軸0.42mの円形で、深さ0.15mを測る。覆土はにぶい黄褐色粒子と赤褐色粒子を含む黒色土である。

遺物 (第8図 第2表 図版10)

出土状況：本遺構から総数14点、総重量54.4gの土師器小破片が出土した。貯蔵穴から出土した11点から1点を図化した。

土器：1は折返し口縁壺の口縁部片で、口端部は面取りされ、外面は横ハケメ調整、内面は横ハケメ調整が施される。器壁は摩耗している。

時期

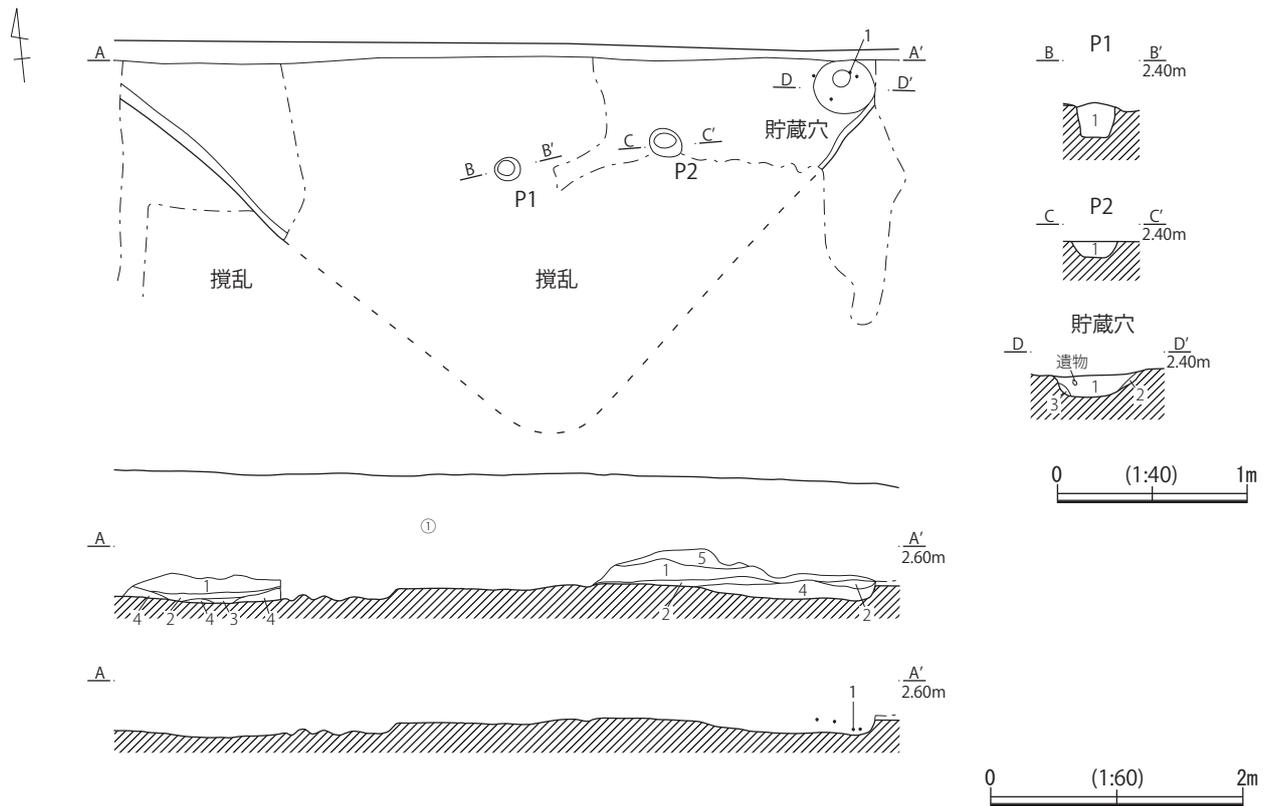
出土遺物から古墳時代前期と考えられる。



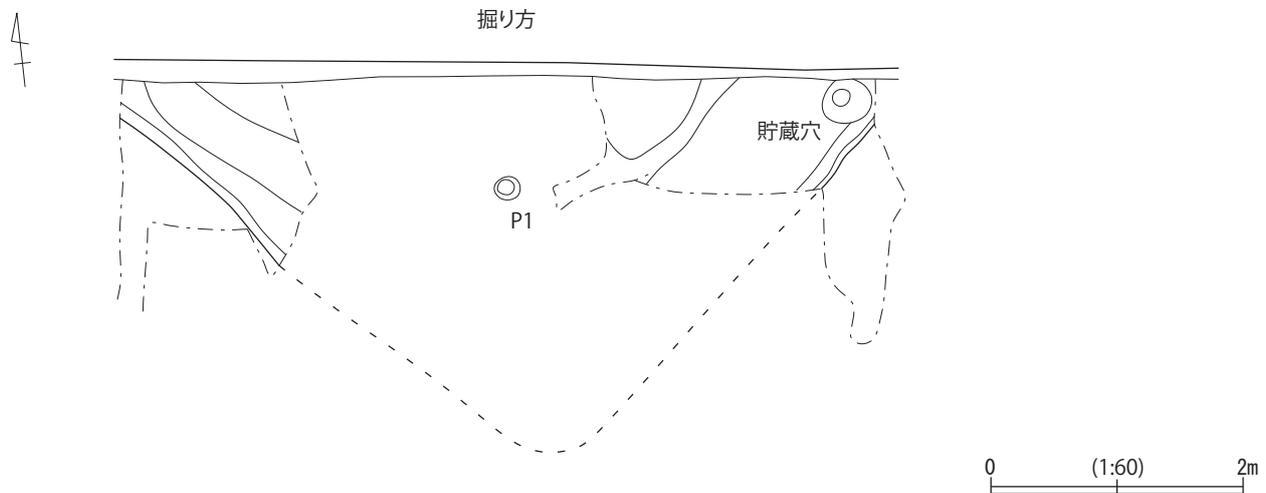
第8図 第1号住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)

第2表 第1号住居跡出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
8-1 10-SI01-1	SI01	土師器	壺	口縁部	5以下	- <1.1> -	7.7	外面：折返し口縁、口端部面取、横ハケメ 内面：横ハケメ	長石、石英、 土器破碎粒	良好	外面：にぶい黄褐色 (10YR7/4) 内面：にぶい黄褐色 (10YR6/3)	器壁が摩耗



- SI01
- ①層 盛土 ガラ、砂利等を含む(カクラン)。
 - 1層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)をやや多く含む。赤褐色粒子(φ3mm)を若干含む。
 - 2層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10~20mm)を多く含む。ブロック(φ10mm)の硬化面を含む。床か。1層よりもやや粘性あり。
 - 3層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子をブロック(φ20~40mm)を多く含む。2層に近い。
 - 4層 褐色土(10YR4/4) しまりあり、粘性あり。黒褐色土を混入する。赤褐色粒子(φ1~2mm)をやや多く含む。
 - 5層 暗灰黄色土(2.5Y5/2) しまりあり、粘性なし。赤褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。主に砂質を呈するが若干の粘性を有する。
- SI01-P1
- 1層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロック(φ10~30mm)をやや多く含む。
- SI01-P2
- 1層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ3~7mm)を含む。明赤色粒子(φ3mm)を含む。
- SI01-貯蔵穴
- 1層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)をやや多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)を含む。
 - 2層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロック(φ10mm)を含む。やや砂質気味。
 - 3層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性ややあり。赤褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を含む。やや砂質を呈する。



第9図 第1号住居跡実測図 (S=1/40・1/60)

第2節 周溝状遺構

第1号周溝状遺構—SX01

遺構（第10・11図 第7表 図版3-6～8）

位置：A 2～3、B 2～3、C 2グリッド。重複関係：第1号溝状遺構に切れ、東西に分かれている。平面形状・規模：東側が長さ4.9m、上幅0.75～0.95m、下幅0.70～0.95m、西側が長さ2.4m、上幅1.2～1.3m、下幅0.85～1.15mを測り、全体の長さは9.0mである。東端は半円形に終端し、西端は攪乱で壊されているが調査区外に続く。東側に開口部を持つ周溝状遺構と推定される。深さは遺構確認面から、東側が0.54m、西側が0.49mである。断面形状は逆台形を呈する。主軸方位：N-86°-W。覆土：8層に分層した。下層はにぶい黄褐色土に黒褐色土が混じる。中位層の北側にはにぶい黄褐色土粒子があまり含まれない黒色土が三角堆積し、その上ににぶい黄褐色土粒子を多く含む黒褐色土がU字状に入り、上層は黒色土が皿状に堆積する自然堆積である。東側はテストピットの5層まで掘り込んでいる。

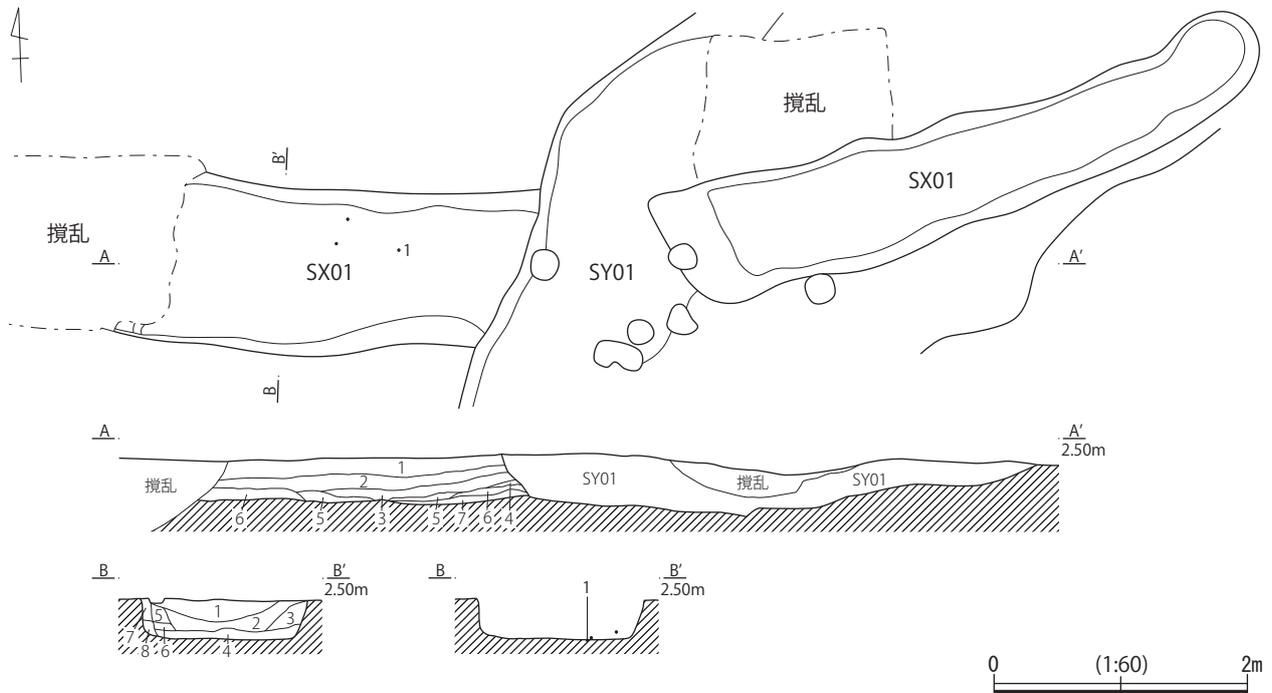
遺物（第12図 第3表 図版10）

出土状況：西側の下層から土師器片3点、総重量36.1gが出土した。このうち1点を図化した。

土器：1は折返し口縁壺の口縁部片で、口端部は面取りされている。内外面が著しく摩耗している。このため器面調整は不明瞭だが、外面は横ナデ、内面は斜めナデと思われる。

時期

出土遺物から古墳時代前期と考えられる。

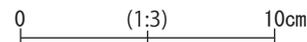


第10図 第1号周溝状遺構実測図1 (S=1/60)

- SX01 A-A'
- 1層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~8mm)を含む。暗赤褐色粒子(φ3~5mm)を若干含む。褐灰色ブロックを含む。B-B'1層と同層。
 - 2層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)を多く含む。暗赤褐色粒子(φ3~5mm)を若干含む。B-B'2層と同層。
 - 3層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)をやや多く含む。暗赤褐色粒子(φ3~5mm)を若干含む。
 - 4層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子を多く含む。3層と5層の漸移層的。
 - 5層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりあり、粘性あり。暗褐色土が少なく黄褐色土ブロックが多い。灰黄褐色ブロック(φ15mm)を含む。
 - 6層 にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまりあり、粘性あり。暗褐色土をやや含むがにぶい黄褐色土を主体。灰黄褐色粘土を含む。B-B'5層と同層。
 - 7層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色土主体。暗褐色土をやや含む。

- SX01 B-B'
- 1層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を含む。暗褐色粒子(φ3~5mm)を若干含む。A-A'1層と同層。
 - 2層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)を多く含む。暗褐色粒子(φ3~5mm)を若干含む。A-A'2層と同層。
 - 3層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)をやや多く含む。暗褐色粒子(φ3~5mm)を若干含む。
 - 4層 にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまりあり、粘性あり。暗褐色土をやや含むが、にぶい黄褐色土主体。灰黄褐色粘土を含む。A-A'6層と同層。
 - 5層 にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまりあり、粘性あり。黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)を多く含む。暗褐色粒子(φ1~4mm)を含む。
 - 6層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりあり、粘性あり。黄褐色粒子・ブロック(φ2~8mm)をやや多く含む。暗赤褐色土混じる。
 - 7層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色土主体。暗褐色粒子(φ1~3mm)を若干含む。
 - 8層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまりあり、粘性あり。黄褐色粒子・ブロック(φ2~8mm)を含む。暗褐色粒子(φ1~5mm)を含む。砂質層。

第11図 第1号周溝状遺構実測図2



第12図 第1号周溝状遺構出土遺物実測図(S=1/3)

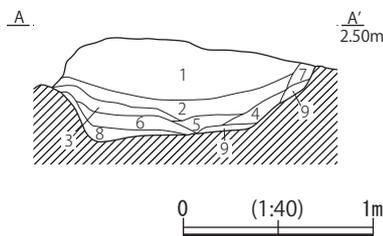
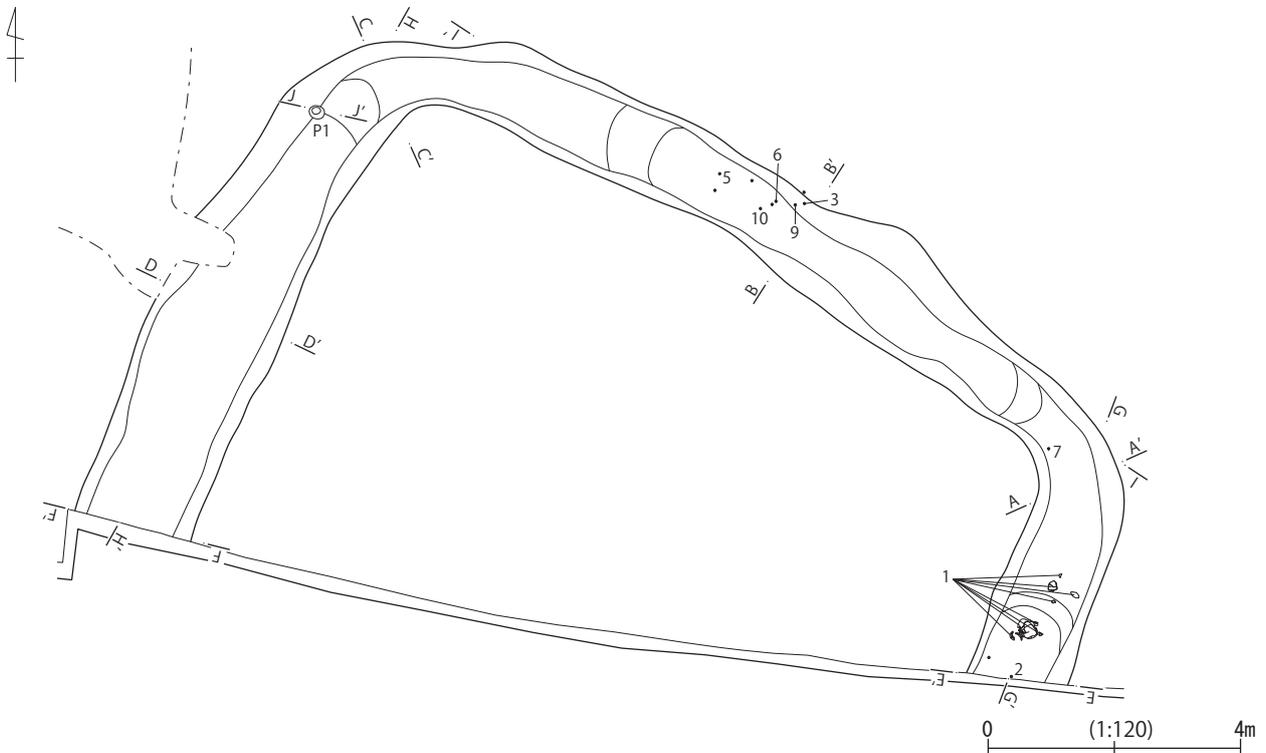
第3表 第1号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	部位	残存率(%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
12-1	SX01	土師器	壺	口縁部	5以下	<8.4>	9.9	外面:折返し口縁、端面取り、横ナデ 内面:横・斜めナデ	黒色粒子、土器破砕粒	良好	外面:浅黄橙色(10YR8/4) 内面:明黄褐色(10YR7/6)	器壁の摩耗が著しくナデが不明瞭
10-SX01-1						<2.55>						

第2号周溝状遺構-SX02

遺構 (第13～15図 第7表 図版4-1～5、5-1～4)

位置：C 2～4、D 2～3、E 2～3、F 3～4 グリッド。重複関係：なし。平面形状・規模：調査区をコの字状に巡り、南側は調査区外に続いている。北西-南東軸方向 15.5 m、北東-南西軸方向 8.2 mを測る。方台部は、北西-南東軸方向が 12 m、北東-南西軸方向が 6.9 mを測る。西溝は上部幅 2.1～1.65 m、下端幅 0.85～1.7 m、確認面からの深さ 0.51 m、北溝は上部幅 0.95～1.4 m、下端幅 0.65～1.1 m、確認面からの深さ 0.42 m、東溝は上端幅 1.4～1.55 m、下端幅 0.9～1.1 m、確認面からの深さ 0.58 mである。溝の断面形状は逆台形であるが、外側がややゆるい傾斜をもって立ち上がるのに対して方台部側は垂直気味に立ち上がる。溝底は、北東隅が深さ 0.21 m、北西隅が深さ 0.34 mと浅く、北溝は東西隅から中央に緩やかに傾斜するが、東西溝は各隅からやや短い段差をもって落ち込んでいる。主軸方位：N-27°-E。覆土：黒色土で、にぶい黄褐色土の粒子やブロックの多寡により6～9層に分層した。堆積状況から自然堆積と考えられる。



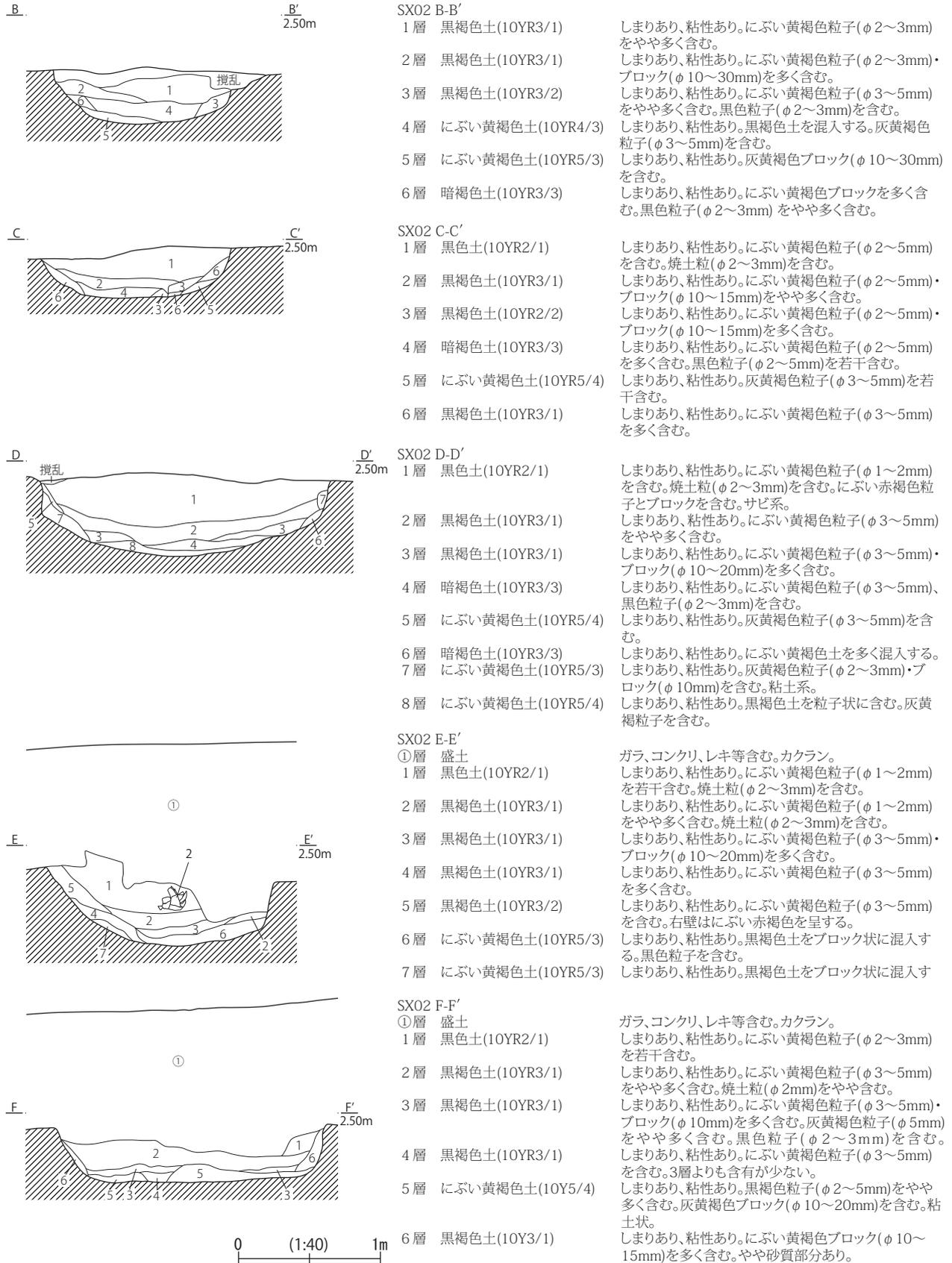
SX02 A-A'

- | | |
|---------------------|---|
| 1層 黒色土(10YR2/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2～5mm)を含む。焼土粒(ϕ 2～5mm)を若干含む。 |
| 2層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2～5mm)・ブロック(ϕ 10～15mm)をやや多く含む。 |
| 3層 にぶい黄褐色土(10YR4/3) | しまりあり、粘性あり。黒褐色土を含む。灰黄褐色粒子(ϕ 3～5mm)をやや多く含む。 |
| 4層 黒褐色土(10YR2/2) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2～5mm)・ブロック(ϕ 10～20mm)をやや多く含む。 |
| 5層 暗褐色土(10YR3/2) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2～5mm)をやや多く含む。灰黄褐色粒子(ϕ 2～5mm)をやや多く含む。 |
| 6層 灰黄褐色土(10YR4/2) | しまりあり、粘性あり。黒褐色土を混入する。褐灰粒子(ϕ 2～5mm)を含む。粘土系。 |
| 7層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3～5mm)を多く含む。白色粒子(ϕ 1～2mm)を含む。 |
| 8層 にぶい黄褐色土(10YR5/3) | しまりあり、粘性あり。暗黄灰色ブロックをやや層状に含む。粘土系。 |
| 9層 黒褐色土(10YR2/2) | しまりあり、粘性なし。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2～3mm)を含む。砂質土。 |

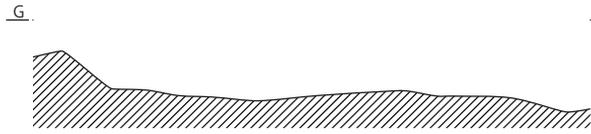
第13図 第2号周溝状遺構実測図1 (S=1/120・1/40)

附属施設：北東隅近くに径 0.25 m、溝底からの深さ 0.13 m のピット 1 基を検出した。

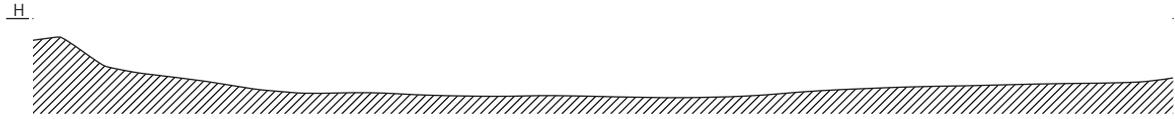
備考：方台部は、攪乱が著しく盛土や他の施設は確認できなかった。



第 14 図 第 2 号周溝状遺構実測図 2 (S=1/40)

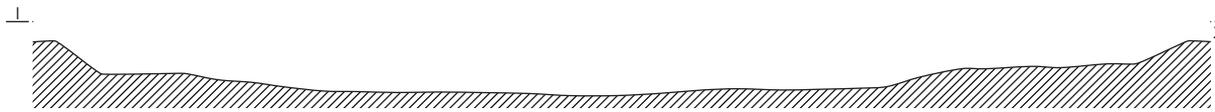


G' / 2.50m



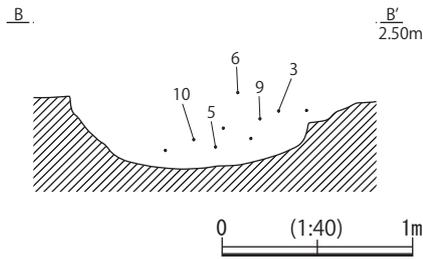
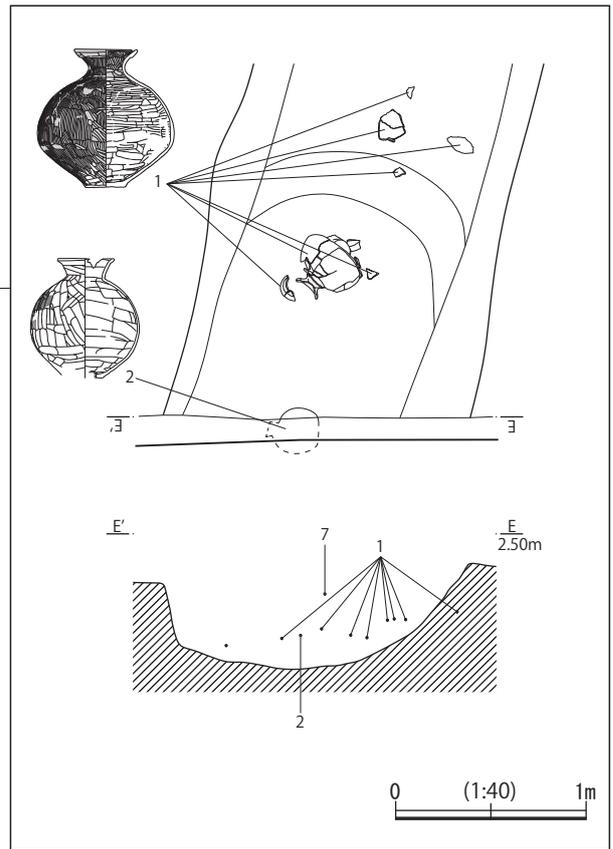
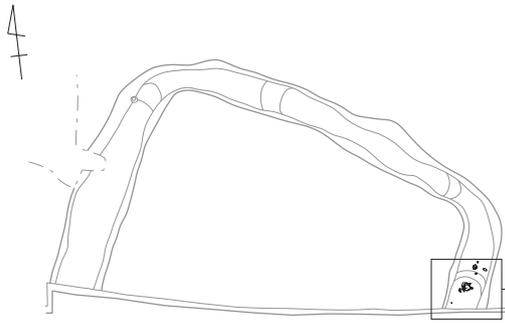
H' / 2.50m

0 (1:60) 2m



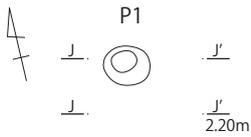
I' / 2.50m

0 (1:80) 2m



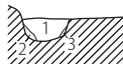
B' / 2.50m

0 (1:40) 1m



P1

J' / 2.20m



0 (1:40) 1m

SX02-P1

1層 黒褐色土(10YR3/2)

2層 黒褐色土(10YR3/1)

3層 にぶい黄褐色土(10YR5/3)

しまりあり、粘性あり。灰黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10~15mm)を多く含む。粘性あり。

しまりあり、粘性あり。灰黄褐色粒子(φ3~5mm)をやや多く含む。やや砂質的。

しまりあり、粘性あり。黒褐色土をやや混入する。

第15図 第2号周溝状遺構実測図3 (S=1/60・1/80・1/40)

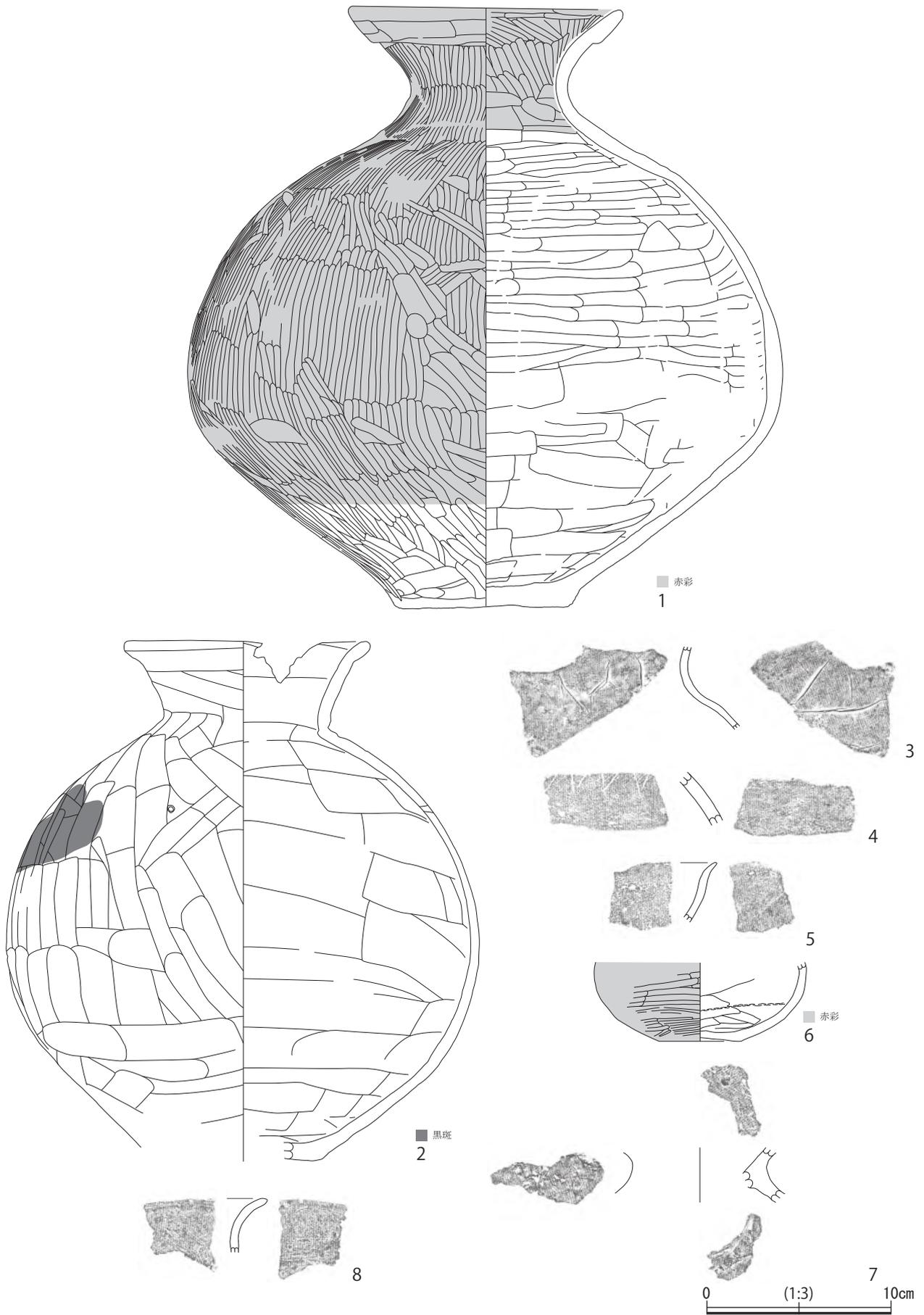
遺物（第16・17図 第4表 図版2-1・2、図版10・11）

出土状況：総数412点、総重量6,153.4gが出土した。礫1点、その他2点のほかは全て土師器である。北溝の中央付近の上層から中層より破片類が、また、東溝の南端付近の下層から略完形の壺形土器2個体が出土した。略完形の2個体を含めて10点を図化した。

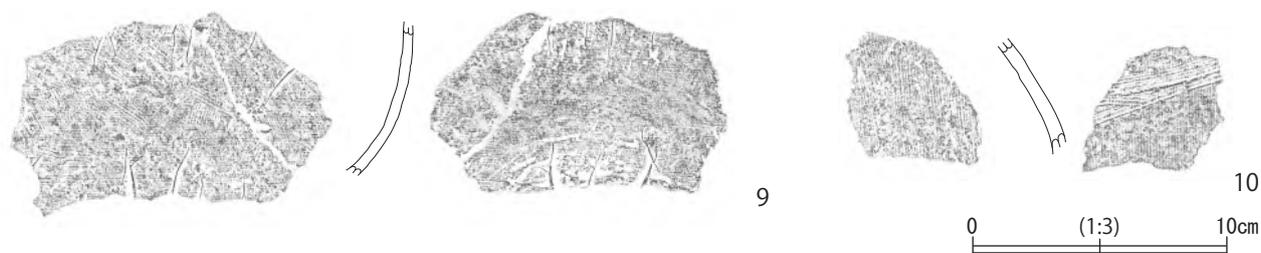
土器：1は東溝の南端付近から出土した略完形の壺。下膨れ型の胴部（最大径32.4cm）からくの字に屈曲する頸部より折返し口縁へと続く。口縁部外面は横ハケメの後に横ミガキ。頸部から胴部は縦ミガキを主体とし、一部斜めや横のミガキを施す。口縁部内面は斜めミガキ、胴部内面は横ナデで一部はミガキに近い。内面は口縁から頸部まで、および外面は底部付近を除いて赤彩が施されており、口縁部や肩部には文様はない。2は東溝の調査区南端より出土した略完形の壺。最大径（25.8cm）は胴部中央より下であるが、球状の胴部からやや直立気味な頸部より幅が狭い折返し口縁に続く。頸部外面は斜めナデ、胴部は縦と斜めナデが主体で一部にハケメがみられるが全面的ではない。肩部付近には不整形の黒斑が存在し、径4mmの穿孔が1箇所穿たれている。口縁部や肩部に文様は施されていない。器壁は摩耗により荒れている。内面は横ナデ。底部は一部を残したまま打ち欠きにより穿孔されている。3～6は北溝の中央付近から出土した。3は壺もしくは甕の頸部片で、内外面とも器壁の摩耗が著しいが、外面には縦ハケメが残る。4は西溝から出土した壺の肩部片で、単節LR縄文施文後に沈線で鋸歯状文を施文するが、縄文は磨り消さない。無文部には赤彩が一部残り、赤彩されていたと思われる。内面は横ナデと縦ミガキ。5は小型の壺の口縁から胴部片で、口唇部が短く外反する。外面は摩耗が著しくナデかと思われ、内面は斜めにミガキを施す。外面の器壁は摩耗している。6は小型壺、もしくは埴の底部から胴部で、径4.5cmの丸底底部から丸みを帯びて胴部が立ち上がる。外面は横ハケメ後に横方向にミガキを施し赤彩する。内面は横ナデと縦方向のミガキを施す。7は北東隅から出土した台付甕の脚部片で、接合部に充填された粘土が剥落したものと思われる。外面は縦ハケメ、接合部にもハケメが施される。内面は横ナデである。8は西溝から出土した甕の口縁部片で、外面は斜めのハケメ後、口唇部が横ナデされる。内面は横ナデ。9と10は北溝の中央付近から出土した甕の胴部片である。外面は斜めと縦ハケメ、内面は斜めハケメと横ナデである。胎土に灰白色焼成粘土粒を多く含むため同一個体の可能性がある。

時期

東溝から出土した1と2の折返し口縁壺は頸部が短く、口縁部の折り返し幅が狭く、口縁部や肩部に施文は施されていない。1はハケメ調整後に丁寧なミガキと赤彩が施され、2は器面のほとんどがナデ調整されている。また、北溝から出土した6の小型丸底壺や、西溝から出土した8のキザミのない甕の口縁部などから、本遺構の時期は古墳時代前期と考えられる。



第16図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図1 (S=1/3)



第17図 第2号周溝状遺構出土遺物実測図2 (S=1/3)

第4表 第2号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
16-1 10-SX02-1	SX02	土師器	壺	口縁～ 底部	略完形	14.6 37.8 9.4	3,400.0	外面：折返し口縁、折返し部横 ハケメ後横ミガキ、頸部・肩部・ 胴部は一部縦ハケメ後縦と斜め ミガキ 内面：口縁部斜めミガキ、胴部 横ナデ、ややミガキに近い 外面：底部付近以外赤彩 内面：口縁から頸部まで赤彩	長石、石英、 灰白色焼成粘 土粒、土器破 砕粒	良好	外面：暗赤色 (10R3/6) 内面：明赤褐色 (2.5YR5/8)	
16-2 10-SX02-2	SX02	土師器	壺	口縁～ 底部	略完形	13.4 28.6 <8.6>	1,600.0	外面：弱い折返し口縁、頸部斜 めナデ、胴部縦ナデ→斜めナデ、 一部に斜めハケメ残る 内面：横ナデ 底部：打ち欠きによる穿孔	長石、石英、 白色粒子、土 器破砕粒	良好	外面：橙色 (7.5YR7/6) 内面：浅黄褐色 (10YR8/3)	外面に黒 斑、肩部 に径 4mm の穿孔 1 箇所あり 全体に器 壁が摩耗
16-3 10-SX02-3	SX02	土師器	壺	頸部	5以下	— <4.6> —	21.3	外面：縦ハケメ 内面：横ナデカ	長石、黒色粒 子、灰白色焼 成粘土粒、土 器破砕粒	良	外面：橙色 (5YR7/6) 内面：にぶい橙色 (7.5YR7/4)	甕カ 器壁の摩 耗が著し い
16-4 10-SX02-4	SX02	土師器	壺	肩部	5以下	— <2.9> —	25.7	外面：単節 LR 縄文、鋸歯状文、 縄文は摺り消さない、無文部赤 彩痕 内面：横ナデ、縦ミガキ	長石、石英、 黒色粒子、土 器破砕粒	良好	外面：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 内面：褐灰色 (7.5YR4/1)	赤彩は痕 跡のみ
16-5 10-SX02-5	SX02	土師器	小型壺	口縁～ 胴部	5以下	— <3.2> —	7.9	外面：摩耗が著しい、ナデカ 内面：口唇部横ナデ、胴部斜め ミガキ	長石、石英、 土器破砕粒 (少)	良好	外面：にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面：橙色 (5YR7/6)	外面の器 壁摩耗
16-6 10-SX02-6	SX02	土師器	小型壺	底部～ 胴部	10以 下	— <4.3> 4.5	50.3	小型丸底 外面：横ハケメ後ミガキ、赤彩 内面：斜めナデ、輪積み痕	長石、石英、 黒色粒子、赤 色粒子	良好	外面：赤褐色 (2.5YR4/6) 内面：橙色 (5YR6/6)	埴形土 器カ
16-7 10-SX02-7	SX02	土師器	台付甕	脚部	5以下	— <3.0> —	19.2	外面：縦ハケメ 内面：横ナデ	長石、灰白色 焼成粘土粒 (多)、土器破 砕粒	良好	外面：にぶい橙色 (7.5YR6/4) 内面：橙色 (7.5YR6/6)	底部と脚 部の接合 部
16-8 10-SX02-8	SX02	土師器	甕	口縁部	5以下	— <2.9> —	9.1	外面：口唇部横ナデ、斜めハケ メ 内面：横ハケメ→横ナデ	長石、石英、 黒色粒子、土 器破砕粒	良好	内外面：にぶい橙色(7.5YR6/4)	
17-9 11-SX02-9	SX02	土師器	甕	胴部	6以下	— <6.15> —	55.4	外面：斜めハケメ 内面：斜めハケメ、横ナデ	長石、灰白色 焼成粘土粒 (多)、土器破 砕粒	良好	外面：灰褐色 (7.5YR5/2) 内面：にぶい橙色 (7.5YR6/4)	
17-10 11-SX02-10	SX02	土師器	甕	胴部	5以下	— <4.6> —	18.8	外面：縦ハケメ 内面：斜めハケメ、横ナデ	長石、灰白色 焼成粘土粒 (多)、土器破 砕粒	良好	外面：黒褐色 (7.5YR3/1) 内面：黒褐色 (2.5YR3/1)	9と同一 個体カ

第4章 平安時代の遺構と遺物

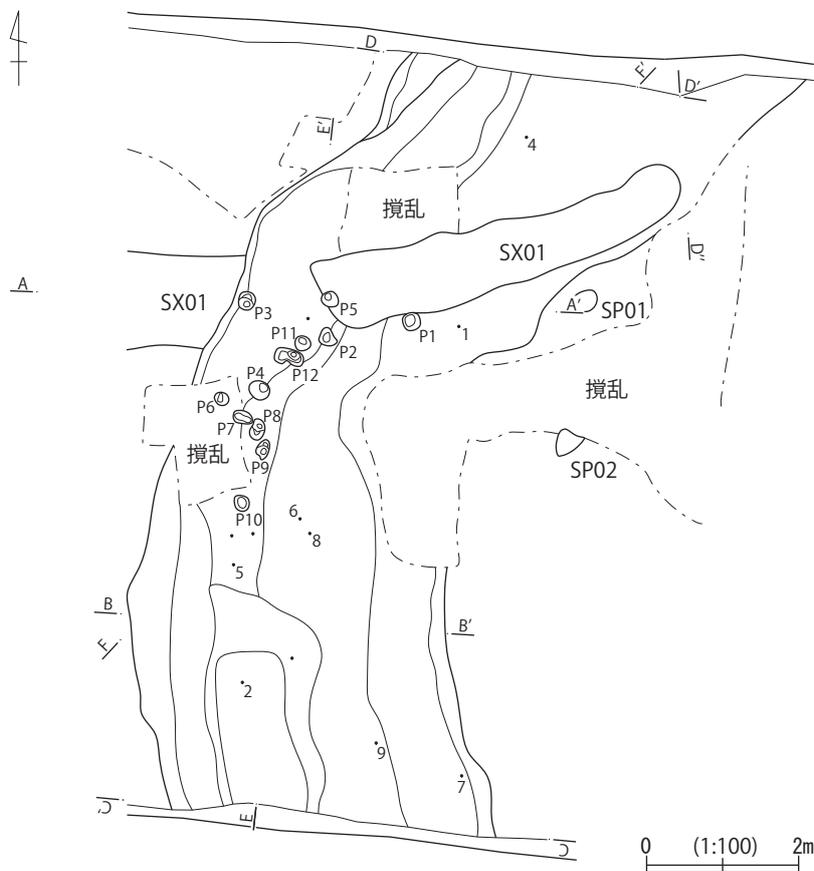
第1節 溝状遺構

第1号溝状遺構—SY01

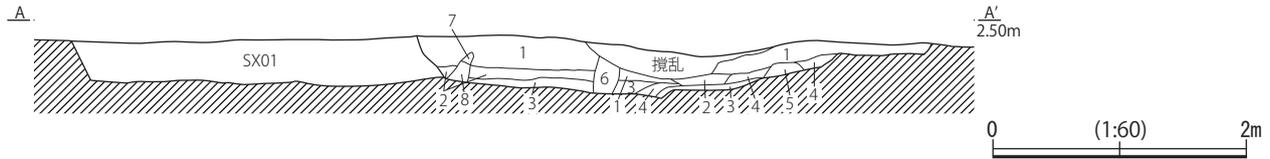
遺構（第18～22図 第7表 図版5-5～8、6-1・5～8、7-1～4）

位置：B 2～4、C 2～3グリッド。重複関係：第1号周溝状遺構を切る。平面形状・規模：南からやや東に向けて緩やかな弧状を呈して北東に向かい、南北は調査区外に続いている。長さは11.0 m、南端の上幅4.1 m、下幅0.9 m、北東の上幅3.6 m、下幅1.7 mを測る。深さは南端が最も深く、遺構確認面から1.02 m、北に向かって緩やかに立ち上がりながら浅くなり、B 3グリッドで0.57 mとなる。B 3グリッドからは、北東に向けて緩やかに傾斜しながら落ち込み、北東端で0.85 mを測る。断面形状は逆台形に近いが、東側が緩やかに立ち上がるのに対して西側は垂直気味に立ち上がる。主軸方位：南から、 $N-7^{\circ}-W \sim N-43.5^{\circ}-E$ 。覆土：黒色土を主体とし、下層ににぶい黄褐色土の粒子やブロックを含む自然堆積と考えられる。

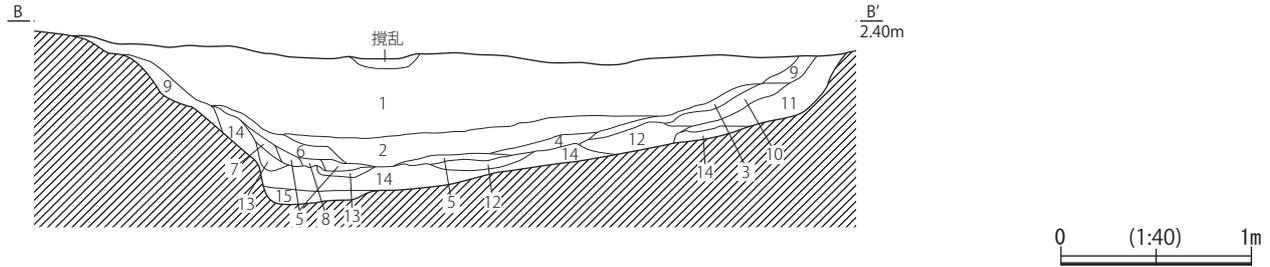
附属施設：溝底から小穴12基を検出した（P1～12）。溝状遺構のほぼ中央、最も浅いB 3グリッド北側にまとまる。P1、P3、P5が北側で、P10が南側になり、その内側に集中する。平面形状は円形と楕円形を呈し、深さは0.08～0.51 mを測る。建物ではない工作物の可能性もある。



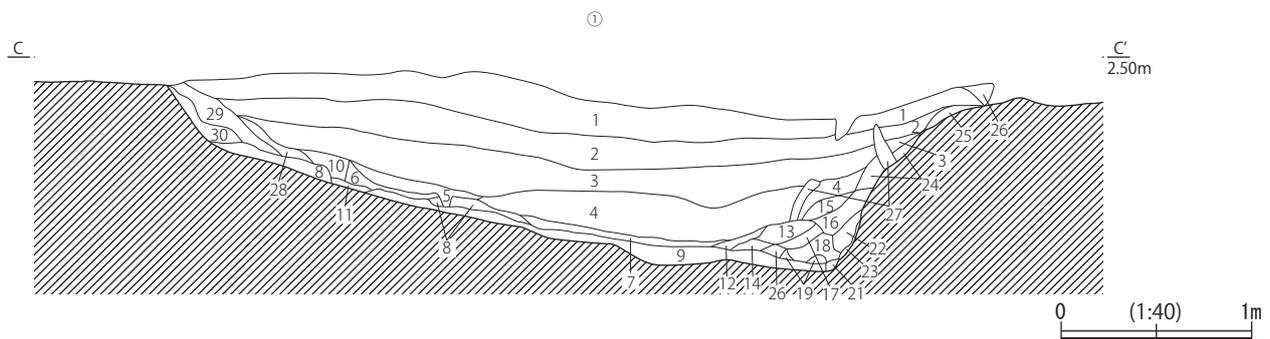
第18図 第1号溝状遺構実測図1 (S=1/100)



- SY01 A-A'
- | | |
|------------------|---|
| 1層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を若干含む。 |
| 2層 黒褐色土(10YR3/2) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。1層よりもやや明色。 |
| 3層 暗褐色土(10YR3/3) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)を多く含む。 |
| 4層 暗褐色土(10YR3/4) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子・ブロック(φ2~10mm)を多く含む。3層よりも明色。 |
| 5層 暗褐色土(10YR3/4) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロック(φ6~20mm)を多く含む。 |
| 6層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を下部に多く含む。1~3層よりもやや暗色。ピットか。 |
| 7層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりややあり、粘性あり。赤褐色焼土粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。しまるがやややわらかい。 |
| 8層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりややあり、粘性あり。赤褐色焼土粒子(φ2~5mm)・焼土塊(φ5~10mm)を多く含む。炭化物・炭化材を含む。固くなくやややわらかくボソボソ。ピットか。 |



- SY01 B-B'
- | | |
|---------------------|---|
| 1層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2mm)を若干含む。褐灰色ブロック(φ10~20mm)を含む。赤褐色粒子(φ2mm)を若干含む。 |
| 2層 黒褐色土(10YR3/2) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を含む。褐灰色ブロック(φ10~20mm)を含む。にぶい赤褐色粒子とブロックを多く含む。 |
| 3層 暗褐色土(10YR3/3) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2mm)を多く含む。褐灰色粒子(φ2~5mm)を含む。にぶい赤褐色粒子(φ2mm)を含む。 |
| 4層 褐灰色土(10YR4/1) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を若干含む。褐灰色ブロック(φ10~20mm)を含む。橙色粒子をやや多く含む。 |
| 5層 褐灰色土(10YR5/1) | しまりあり、粘性あり。灰黄褐色土を下部に含む。橙色ブロックと粒子をやや多く含む。ねばる。 |
| 6層 褐灰色土(10YR5/2) | しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~5mm)、にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を多く含む。粘性やや強い。 |
| 7層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) | しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~5mm)を多く含む。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を多く含む。 |
| 8層 にぶい黄褐色土(10YR5/3) | しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~5mm)を多く含む。粘性強い。 |
| 9層 暗褐色土(10YR3/4) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を含む。固くしまる。 |
| 10層 黒褐色土(10YR3/2) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。固くしまる。9層よりも暗色。3層と同一層か。 |
| 11層 暗褐色土(10YR3/3) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を含む。9層よりもやや暗色であるが同一層か。 |
| 12層 褐灰色土(10YR5/1) | しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~5mm)をやや含む。灰黄褐色ブロック(φ6~10mm)を含む。13層に近い。 |
| 13層 暗褐色土(10YR3/3) | しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~5mm)、黄褐色粒子(φ2~5mm)を含む。 |
| 14層 灰黄褐色土(10YR6/2) | しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~5mm)・ブロック(φ10mm)をやや多く含む。酸化鉄ブロックを含む。 |
| 15層 灰白色土(10YR7/1) | しまりあり、粘性なし。橙色粒子・ブロックを多く含む。砂質。黒褐色土を含む。根痕。 |

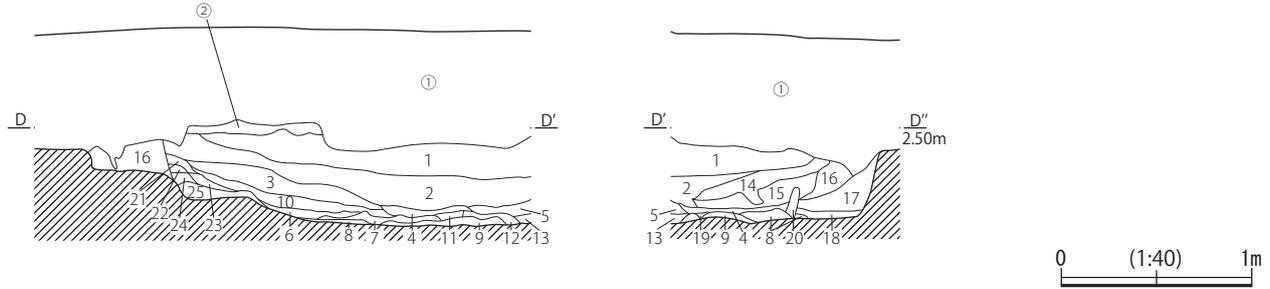


- SY01 C-C'
- | | |
|------------------|--|
| ①層 盛土 | ガラ、碎石、黒色土、褐灰色土を含む。ボソボソ。 |
| 1層 黒褐色土(10YR3/2) | しまりあり、粘性あり。褐灰色粒子(φ2~3mm)を多少、焼土粒(φ2~3mm)を若干含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)を含む。 |
| 2層 黒褐色土(10YR3/1) | しまりあり、粘性あり。褐灰色粒子(φ2~3mm)・ブロック(φ10~20mm)を含む。 |
| 3層 黒色土(10YR2/1) | しまりあり、粘性あり。褐灰色ブロック(φ20mm)を若干含む。赤褐色粒子(φ2mm)を若干含む。 |
| 4層 黒褐色土(10YR2/2) | しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。にぶい赤褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)幅5mmの層状に多く含む。 |

第19図 第1号溝状遺構実測図2 (S=1/60・1/40)

SY01 C-C'

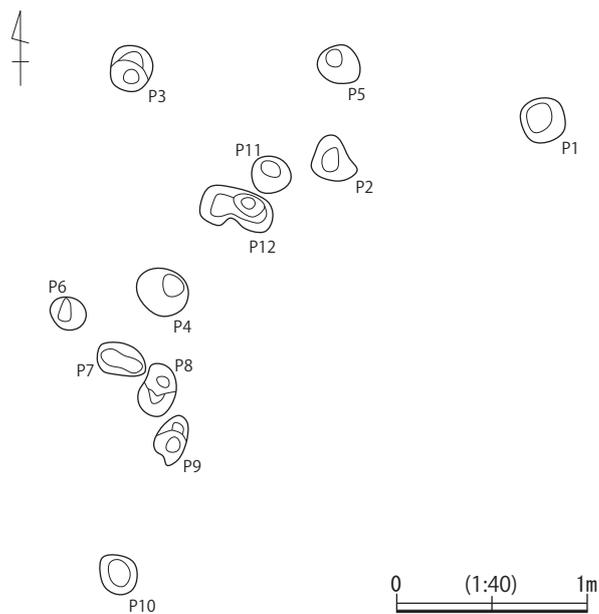
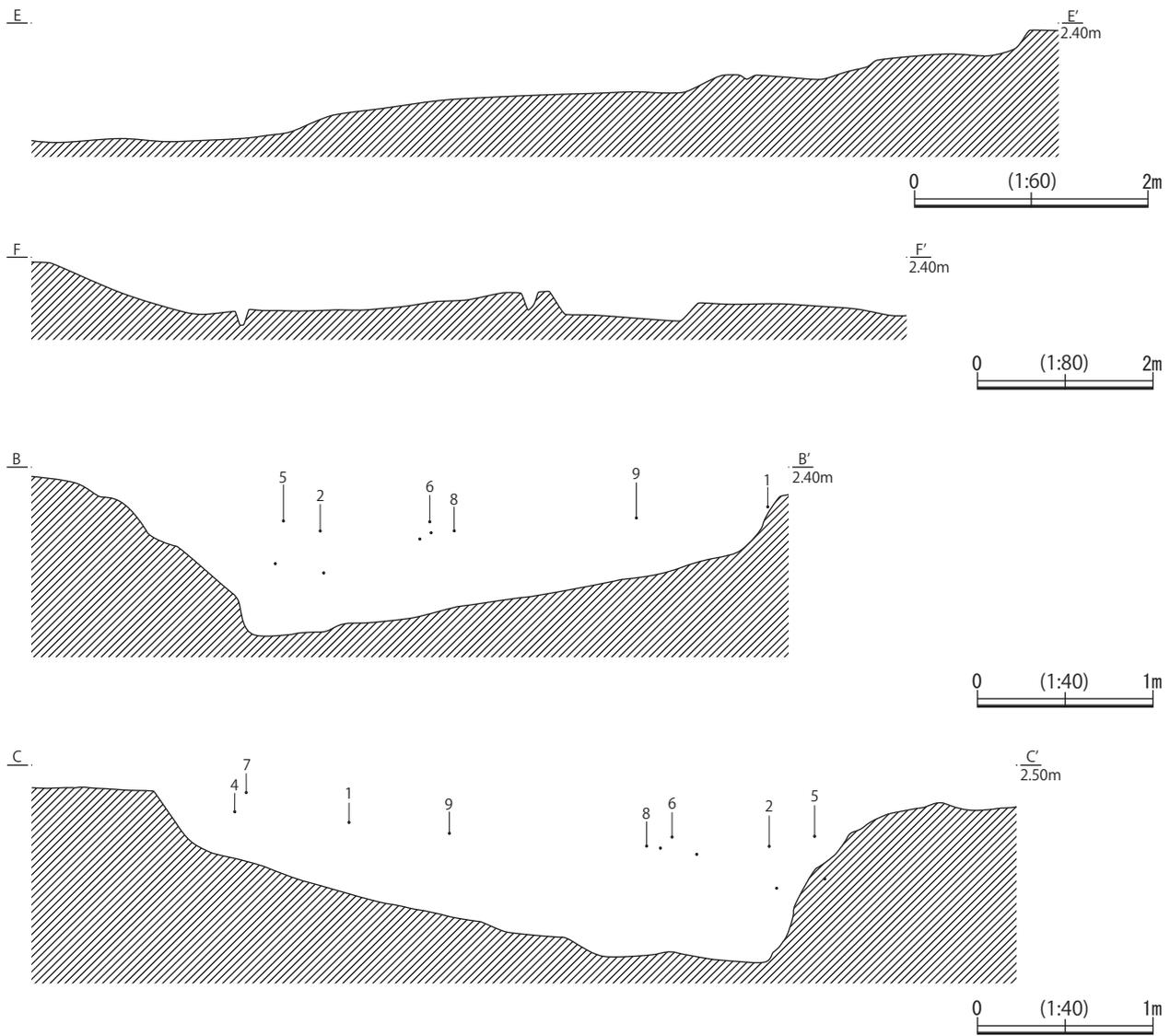
- 5層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。褐灰色粒子(φ2~3mm)、灰黄褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。
- 6層 褐灰色土(10YR4/1) しまりあり、粘性あり。褐灰色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。赤褐色粒子(φ2mm)を若干含む。粘性やや強い。
- 7層 褐灰色土(10YR4/1) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色土を含む。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。にぶい赤褐色ブロック(φ10~30mm)を多く含む。粘性やや強い。
- 8層 にぶい黄褐色土(10YR5/3) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色ブロックを含む。黒褐色ブロック(φ10~20mm)を含む。
- 9層 灰黄色土(2.5Y7/2) しまりあり、粘性ややあり。灰黄褐色粒子(φ3~5mm)を含む。橙色ブロックとタテ方向の層状を含む。粘性は上部ややあり、下部は砂質。
- 10層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色粒子(φ3~5mm)を多く含む。6層よりも明色。
- 11層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。にぶい赤褐色粒子(φ2~3mm)を含む。
- 12層 黒褐色土(2.5Y3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。にぶい赤褐色粒子(φ2~3mm)を含む。
- 13層 黄灰色土(2.5Y4/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多量に含む。にぶい赤褐色土を層状に含む。
- 14層 黒褐色土(2.5Y3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)を多く含む。にぶい赤褐色ブロック(φ20~40mm)と層状に含む。
- 15層 黒褐色土(2.5Y3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多量に含む。にぶい赤褐色ブロック(φ10~20mm)を多く含む。
- 16層 黒褐色土(2.5Y3/1) しまりあり、粘性あり。黄灰色粒子(φ2~5mm)・ブロックを多く含む。にぶい赤褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10~40mm)を多く含む。15層よりもブロックが多い。
- 17層 灰黄褐色土(10YR5/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)を多量に含む。にぶい赤褐色粒子(φ3~5mm)と層状に含む。
- 18層 にぶい黄褐色土(10YR6/3) しまりあり、粘性あり。にぶい赤褐色粒子(φ2~5mm)をやや含む。
- 19層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~3mm)を多く含む。
- 20層 にぶい黄褐色土(10YR6/4) しまりあり、粘性あり。橙色粒子(φ2~3mm)を多量に含み、全体が変色している。主体は灰黄褐色土。
- 21層 灰黄褐色土(10YR6/2) しまりあり、粘性あり。灰白色ブロックと橙色粒子(φ2~5mm)を含む。19層に近いが灰白色ブロックが多い。
- 22層 灰黄褐色土(10YR6/2) しまりあり、粘性あり。黒褐色土と線状に混入。橙色粒子(φ2~3mm)を多く含む。
- 23層 にぶい黄褐色土(10YR6/3) しまりあり、粘性あまりなし。橙色粒子を多く含む。砂質。
- 24層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を多く含む。にぶい赤褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。
- 25層 褐色土(10YR4/4) しまりあり、粘性あり。黒褐色土を含む。
- 26層 褐灰色土(10YR6/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を含む。
- 27層 黄灰色土(2.5Y6/1) しまりあり、粘性あり。粘土状のブロック。
- 28層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。
- 29層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)をやや多く、にぶい黄褐色ブロック(φ10~20mm)を多く含む。
- 30層 にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまりあり、粘性あり。にぶい赤褐色粒子(φ1~2mm)を若干含む。



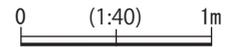
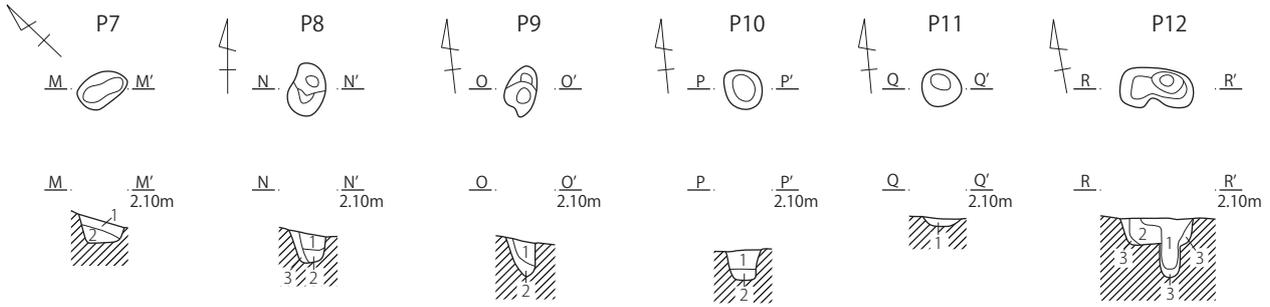
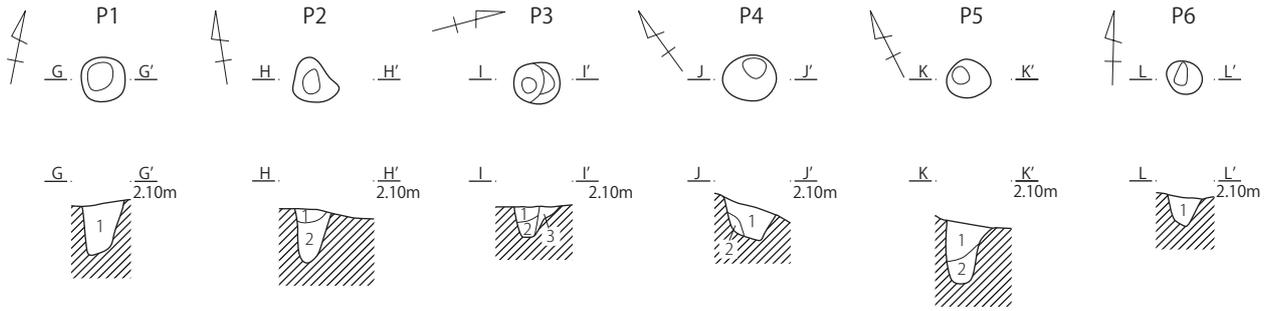
SY01 D-D'・D'-D''

- ①層 盛土 砂利、コンクリ、ガラ等混入。
- ②層 灰黄色土(2.5Y6/2) しまりあり、粘性あり。橙色粒子を(φ2~3mm)を若干含む。乾くと砂質化。
- 1層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ1~2mm)を若干含む。
- 2層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)を含む。
- 3層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。
- 4層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ1~2mm)を多く含む。にぶい黄褐色ブロック(φ10mm)を含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。
- 5層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10~15mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ3~5mm)を多く含む。
- 6層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。
- 7層 褐灰色土(10YR4/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。明赤褐色粒子・ブロック(φ10~30mm)を多く含む。
- 8層 灰黄褐色土(10YR6/2) しまりあり、粘性あり。明赤褐色粒子(φ2~5mm)・ブロック(φ10~30mm)を多く含む。
- 9層 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり、粘性あり。褐灰ブロック、明赤褐色土を多く含む。下部は砂質。下部は粘性なし。
- 10層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。
- 11層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)をやや多く含む。赤褐色粒子(φ3~5mm)を多く含む。
- 12層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。明赤褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。
- 13層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。灰黄褐色ブロック(φ10~20mm)を含む。全体に赤褐色土を含み茶系にでる。
- 14層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)を含む。3層に近い。
- 15層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)を若干含む。14層よりもやや明色。
- 16層 褐色土(10YR4/4) しまりあり、粘性あり。黒色粒子(φ1~2mm)を含む。
- 17層 灰黄褐色土(10YR5/2) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色ブロック(φ10~50mm)を含む。明赤褐色粒子(φ2~3mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。砂質。
- 18層 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり、粘性あまりなし。灰黄色ブロック(φ10~20mm)を多く含む。明赤褐色粒子(φ3~5mm)を多く含む。砂質。
- 19層 黒褐色土(2.5Y3/1) しまりあり、粘性あまりなし。赤褐色粒子(φ2~3mm)を若干含む。砂質。
- 20層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)をやや多く含む。赤褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。根痕か。
- 21層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。2層よりもやや明色。
- 22層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ1~2mm)をやや含む。21・24層よりも黒色。
- 23層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ1~2mm)を若干含む。
- 24層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。赤褐色粒子を含む。
- 25層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色ブロック(φ10~30mm)を多く含む。赤褐色粒子(φ2~5mm)を多く含み、全体に茶系を呈す。

第20図 第1号溝状遺構実測図3 (S=1/40)



第 21 图 第 1 号沟状遺構実測図 4 (S=1/60 · 1/80 · 1/40)



SY01-P1 1層 黒色土(10YR2/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)・ブロック(ϕ 6~10mm)を含む。固くしまる。	SY01-P8 1層 黒色土(10YR2/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロック(ϕ 10~20mm)を多く含む。にぶい赤褐色粒子(ϕ 2~3mm)を含む。
SY01-P2 1層 黒褐色土(10YR2/2) 2層 黒色土(10YR2/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~5mm)をやや多く含む。 しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~3mm)を若干、赤褐色粒子(ϕ 5mm)を若干含む。	2層 黒色土(10YR2/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)を含む。にぶい赤褐色ブロック(ϕ 10mm)を含む。
SY01-P3 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 黒色土(10YR2/1) 3層 にぶい黄褐色土(10YR5/4)	しまりあり、粘性ややあり。焼土塊(ϕ 5~10mm)、赤褐色土を多く含む。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~5mm)を含む。 しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~5mm)・ブロック(ϕ 10mm)をやや多く含む。 しまりあり、粘性ややあり。黒褐色粒子(ϕ 3~5mm)を含む。やや砂質感あり。	3層 灰黄褐色土(10YR6/2)	しまりあり、粘性ややあり。灰白色粒子(ϕ 3~5mm)を多く含む。にぶい赤褐色粒子(ϕ 3~5mm)を含む。やや砂質。
SY01-P4 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 黒褐色土(10YR3/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~3mm)をやや含む。 しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~5mm)を多く含む。	SY01-P9 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 褐灰色土(10YR6/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)を含む。 しまりあり、粘性ややあり。にぶい赤褐色土を全体に混入する。
SY01-P5 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 にぶい黄褐色土(10YR4/3)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)をやや多く含む。 しまりあり、粘性なし。砂質。	SY01-P10 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 黒褐色土(10YR2/2)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)をやや多く含む。 しまりあり、粘性ややあり。にぶい黄褐色ブロック(ϕ 10~20mm)をやや多く含む。にぶい赤褐色粒子(ϕ 3mm)を含む。やや砂質に近い。
SY01-P6 1層 黒色土(10YR2/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)をやや多く含む。	SY01-P11 1層 黒色土(10YR2/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)・ブロック(ϕ 10mm)を多く含む。
SY01-P7 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 灰黄褐色土(10YR4/2)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 2~3mm)を含む。 しまりあり、粘性あり。灰黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)を多く含む。黒褐色土を含有し、やや暗色気味。	SY01-P12 1層 黒色土(10YR2/1) 2層 黒色土(10YR2/1) 3層 褐灰色土(10YR6/1)	しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)を含む。 しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(ϕ 3~5mm)・ブロック(ϕ 10~20mm)を多く含む。 しまりあり、粘性ややあり。にぶい赤褐色粒子(ϕ 1~2mm)を若干含む。灰黄色粒子(ϕ 3~4mm)を含む。やや砂質。

第 22 図 第 1 号溝状遺構実測図 5 (S=1/40)

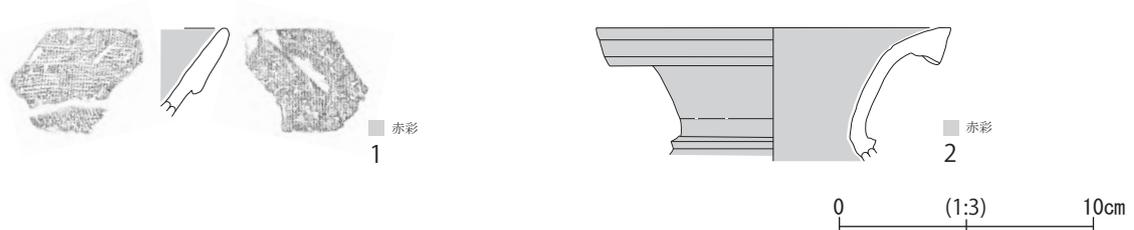
遺物（第 23・24 図 第 5 表 図版 6－2～4、図版 11）

出土状況：土師器片 242 点、須恵器片 31 点、灰釉陶器片 7 点、礫 1 点、その他 1 点の総数 282 点、総重量 1,328.1 g が出土した。また、P 4 と P 9 の覆土から土師器小破片が 1 点ずつ出土した。土師器は古墳時代前期の壺形土器片や甕形土器片、及びロクロ土師器坏形土器である。古墳時代前期土器とロクロ土師器、須恵器の出土位置は遺構の全体に広がり、覆土の中位より上部から出土した。接合できたものを中心に 10 点を図化した。なお、10 の灰釉陶器は、試掘調査時に検出したが、出土位置から本遺構に伴うものと判断した。

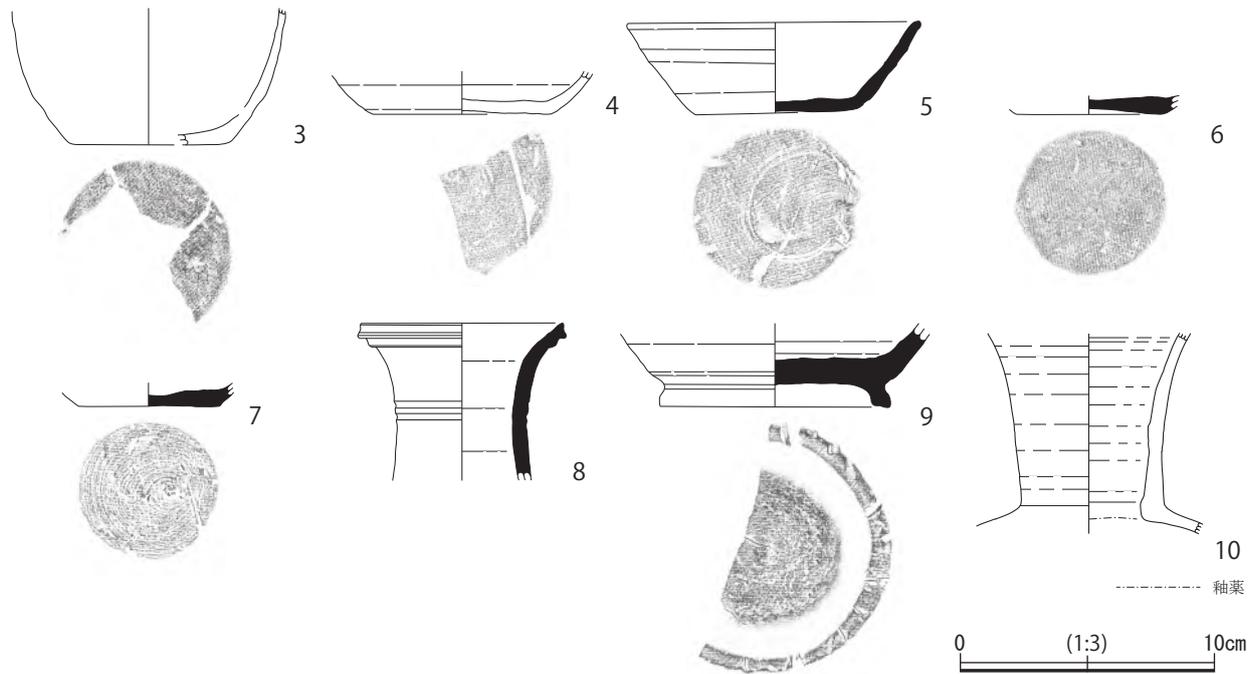
土器：1 は複合口縁壺の口縁部片で、外面は横ハケメ、頸部は縦ハケメ、内面は横ナデである。内外面に赤彩痕跡があり、赤彩されていたと思われる。2 は壺の口縁から頸部で、口縁部の断面形状からパレス土器の壺である。口縁は折返し口縁で折り返し内面に棒状工具で凹凸を作り出す。頸部下端には山形の突帯を貼り付け。内外面に赤彩の痕跡が残る。3 はロクロ土師器の坏で、やや台状の底部から直線的にやや内湾しながら立ち上がる。底部はヘラケズリされており、器壁は全体に摩耗が著しく成形痕が不明瞭で、器種は埴の可能性もある。4 はロクロ土師器坏の底部から体部片で、底部は回転糸切り後に周辺を手持ちヘラケズリ。5 は須恵器坏で、推定口径 11.5cm、底径 6.5cm、内底径 6.0cm、器高 3.6cm を測る。底部は回転糸切り無調整。東金子窯跡の製品である。6 は須恵器坏の底部片で底部のみ完形。外底径 6.0cm、内底径 6.0cm を測る。摩耗が著しく底部の切り離しが明瞭ではないが手持ちヘラケズリかと思われる。南比企窯跡の製品。7 は須恵器坏の底部片で底部のみ完形、外底径 5.6cm、内底径 6.0cm を測る。切り離しは回転糸切り無調整。東金子窯跡の製品。8 は須恵器長頸壺の口縁部。口唇部を摘み上げて立ち上げ、外面には棒状工具で凸帯をつくる。頸部には 2 本の沈線を巡らす。外面の一部に自然灰釉が付着する。湖西窯跡の製品で、口縁部の作りや頸部の沈線からフラスコ形瓶の口縁部と思われる。9 は須恵器長頸壺の底部。ロクロ成形で切り離し後回転ヘラケズリを施したあと、高台を貼付け内側を回転ナデで調整する。南比企窯跡の製品。10 は灰釉陶器長頸瓶の頸部で口縁は欠損している。ロクロ成形で内外面のロクロ目は顕著であり、灰釉は内外面全面に施釉される。猿投窯跡の製品で黒笹 90 号窯式期。

時期

遺構の重複関係から、古墳時代前期よりも新しい。古墳時代前期以降の出土遺物としては、8 のフラスコ形瓶の口縁部は 7 世紀後半と考えられる。また、5 と 6 の須恵器坏は鳩山編年の H VII 期後半、7 が H VIII 期で 9 世紀中葉から後半の時期である。さらに、4 のロクロ土師器坏は底部が回転糸切り後手持ちヘラケズリであること、10 の灰釉陶器長頸瓶は猿投窯跡の黒笹 90 号窯式期と思われることから、9 世紀後半頃には埋没していたと考えられる。



第 23 図 第 1 号溝状遺構出土遺物実測図 1 (S=1/3)



第24図 第1号溝状遺構出土遺物実測図2 (S=1/3)

第5表 第1号溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土 遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
23-1 11-SY01-1	SY01	土師器	壺	口縁部	5以下	— <3.5> —	18.0	外面:複合口縁、口縁部横ハケ、 頸部縦ハケ 内面:横ナデ	長石、石英、 土器破砕粒	良好	外面:にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面:浅黄橙色 (7.5YR8/3)	内外面に赤 彩痕あり
23-2 11-SY01-2	SY01	土師器	壺	口縁~ 頸部	6程度	(14.0) <5.3> —	67.8	パレス土器 折返し口縁、口縁端部折り返し 内面に棒状工具による凹凸、頸 部下端山形凸帯貼り付け	長石、石英、 灰白色焼成粘 土粒、土器破 砕粒	良	外面:にぶい橙色 (7.5YR7/4) 内面:橙色 (7.5YR7/6)	内外面に赤 彩の痕跡が 一部残る 器壁の摩耗 が著しい
24-3 11-SY01-3	SY01	ロクロ 土師器	坏	底部~ 体部	8程度	— <5.41> (6.5)	30.2	ロクロ成形、やや台状底部、底 部ヘラケズリ	石英、白色粒 子、赤色粒子	良	内外面:にぶい橙色 (7.5YR7/4)	全体に摩耗 が著しく整 形痕が不明 瞭
24-4 11-SY01-4	SY01	ロクロ 土師器	坏	底部~ 体部	10程度	— <1.7> (7.0)	20.0	ロクロ成形、底部糸切り後周辺 手持ちヘラケズリ	長石、石英、 黒色粒子、赤 色粒子	良	内外面:橙色 (7.5YR7/6)	全体に器壁 摩耗
24-5 11-SY01-5	SY01	須恵器	坏	口縁~ 底部	75	(11.5) 3.6 6.5	114.8	ロクロ成形、底部糸切り無調整 内底径:6.0 内底口径指数: 52.6%	長石、白色粒 子、黒色粒子	良好	内外面:灰色 (10Y6/1)	東金子産 (HⅧ期)
24-6 11-SY01-6	SY01	須恵器	坏	底部	底 100	— <0.6> 6.0	36.1	ロクロ成形、底部手持ちヘラケ ズリ、内反り 内定径:6.0 底部周囲を打ち欠きカ	長石、赤色粒 子、白色針状 物質	良	外面:にぶい黄橙色(10YR6/3) 内面:にぶい黄橙色(10YR6/4)	摩耗が著し い 南比企産 (HⅧ期)
24-7 11-SY01-7	SY01	須恵器	坏	底部	底 100	— <1.0> 5.6	37.3	ロクロ成形、底部回転糸切り後 無調整、底部周囲打ち欠きカ 内定径:6.0	長石、黒色粒 子、白色粒子	良好	内外面:青灰色 (10BG6/1)	東金子産 (HⅧ期)
24-8 11-SY01-8	SY01	須恵器	長頸瓶	口縁~ 頸部	5程度	(8.0) <6.3> —	61.6	ロクロ成形、口唇部摘み上げ、 棒状工具により凸帯、頸部に沈 線2本、外面一部に自然灰釉	白色粒子、黒 色粒子	良好	外面:にぶい黄橙色(10YR7/2) 内面:灰黄色 (2.5Y6/2)	湖西産 (7世紀後 半)
24-9 11-SY01-9	SY01	須恵器	長頸壺	底部~ 胴部	10	— <3.35> 9.0	119.5	ロクロ成形、底部回転ヘラケズ リ、高台貼付け、回転ナデ	長石、黒色粒 子、白色針状 物質	良好	外面:灰色 (N6/0) 内面:灰色 (5Y6/1)	南比企産 (9世紀)
24-10 11-SY01-10	SY01	灰釉 陶器	長頸瓶	頸部~ 肩部	10程度	— <8.0> —	136.7	ロクロ成形、頸部接合、内外面 ロクロ目、内外面に施釉、外面 に釉垂れ、一部灰かぶり	黒色粒子	良好	外面:オリーブ黄色 (5Y6/3) 内面:浅黄色 (5Y7/3)	猿投産 (K 90)

第5章 時期不明の遺構と遺物

第1節 土坑

第1号土坑—SK01

遺構（第25図 第7表 図版7-5・6）

位置：C3グリッド。重複関係：第2号土坑を切る。平面形・規模：長軸0.69m、短軸0.6mの楕円形を呈する。遺構確認面から深さ0.2mを測る。断面形状は中央がやや低い筒状である。主軸方位：N-8°-W。覆土：3層に分層した。上層はにぶい黄褐色のブロックを多く含む黒褐色土で、下層は黄褐色土が主体の自然堆積である。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。

第2号土坑—SK02

遺構（第25図 第7表 図版7-5・6）

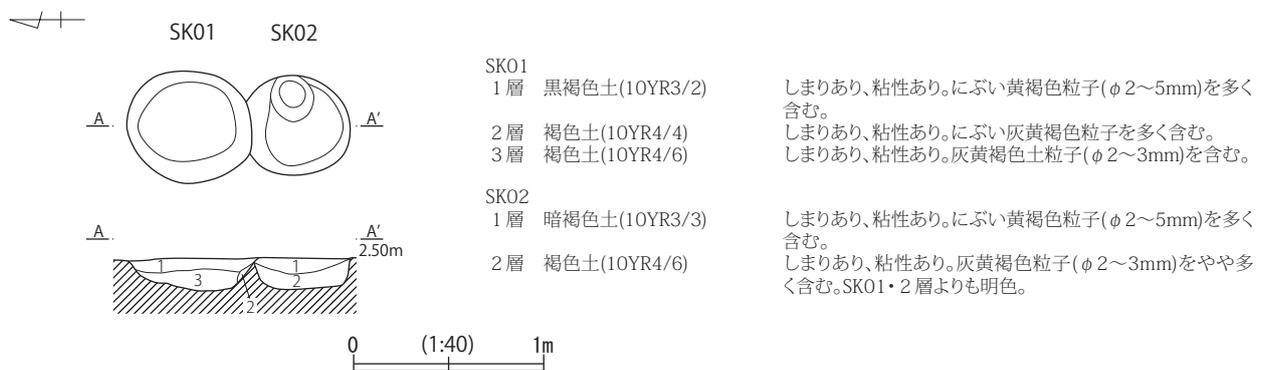
位置：C3グリッド。重複関係：第1号土坑に切られる。南側には第3号ピットが隣接する。平面形・規模：長軸0.59m、短軸0.55mの楕円形を呈する。遺構確認面から深さ0.17mを測る。断面形状は筒状で坑底は平坦である。東側に径0.2m、深さ0.17mのピットが穿たれている。主軸方位：N-80°-E。覆土：2層に分層した。上層はにぶい黄褐色ブロックを多く含む黒褐色土で、下層は黄褐色土が主体の自然堆積である。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。



第25図 第1号・第2号土坑実測図 (S=1/40)

第2節 ピット

第1号ピット—SP01

遺構（第26図 第7表 図版7-7・8）

位置：C2～3グリッド。重複関係：なし。規模：長軸0.33m、短軸0.28mのほぼ円形で、遺構確認面から深さ0.36mを測る。主軸方位：N-7°-W。覆土：にぶい黄褐色粒子を含む黒褐色土である。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。

第2号ピット—SP02

遺構（第26図 第7表 図版8-1・2）

位置：C3グリッド。重複関係：北側を攪乱により消失している。規模：長軸0.42m、短軸0.30mの楕円形と考えられる。遺構確認面から深さ0.39mを測る。主軸方位：N-24°-W。覆土：にぶい黄褐色粒子を含む黒褐色土である。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。

第3号ピット—SP03

遺構（第26図 第7表 図版8-3・4）

位置：C3グリッド。重複関係：北側に第2号土坑が隣接する。規模：長軸0.37m、短軸0.25mの楕円形を呈する。遺構確認面から深さ0.19mを測る。主軸方位：N-78°-W。覆土：にぶい黄褐色ブロックを含む黒褐色土である。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。

第4号ピット—SP04

遺構（第26図 第7表 図版8-5・6）

位置：C4グリッド。重複関係：なし。規模：長軸0.25m、短軸0.20mの円形を呈する。遺構確認面から深さ0.43mを測る。主軸方位：N-67°-E。覆土：にぶい黄褐色ブロックを含む黒褐色

土である。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。

第5号ピット—SP05

遺構（第26図 第7表 図版8-7・8）

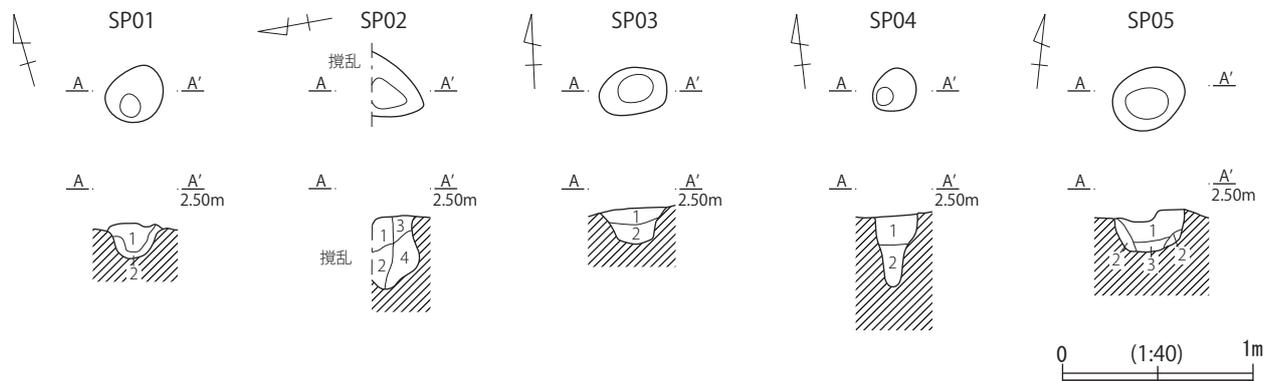
位置：D 2 グリッド。重複関係：第2号周溝状遺構に隣接。規模：長軸 0.39 m、短軸 0.31 mの楕円形を呈する。遺構確認面から深さ 0.22 mを測る。主軸方位：N - 47° - W。覆土：にぶい黄褐色粒子を多く含む黒褐色土で、下層にはにぶい黄褐色ブロックを含む。

遺物

出土状況：出土遺物なし。

時期

時期は不明である。



SP01

- 1層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色土を主体とし黒褐色土を混入する。

SP02

- 1層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10mm)を多く含む。
- 2層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ4~5mm)をやや含む。
- 3層 褐色土(10YR4/4) しまりあり、粘性あり。黒褐色粒子(φ2~5mm)を含む。
- 4層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロック(φ10~20mm)をやや多く含む。

SP03

- 1層 黒褐色土(10YR3/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~5mm)をやや多く含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色土・灰黄褐色土を全体に含むため、1層よりも明色。

SP04

- 1層 黒褐色土(10YR3/2) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロックを下層に多く含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/3) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ2~3mm)をやや多く含む。1層よりもやや明色。

SP05

- 1層 黒色土(10YR2/1) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色粒子(φ3~5mm)・ブロック(φ10~15mm)をやや多く含む。
- 2層 暗褐色土(10YR3/4) しまりあり、粘性あり。にぶい黄褐色ブロック(φ10~20mm)を多く含む。
- 3層 灰黄褐色土(10YR4/2) しまりあり、粘性あり。灰黄褐色粒子(φ3~5mm)を多く含む。粘性あり。

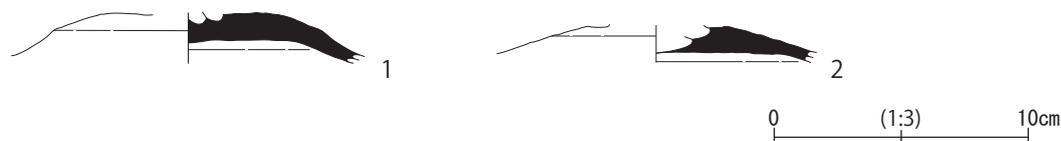
第26図 第1号~第5号ピット実測図 (S=1/40)

第6章 遺構外出土遺物

遺物（第27図 第6表 図版12）

出土状況：表土採集、および試掘調査を含めた遺物は、土師器12点、須恵器4点の総重量279.9gであった。そのうち須恵器2点を図化した。

1、2ともに須恵器蓋の傘部の破片で、ロクロ成形後に頂部を回転ヘラケズリで調整。摘みは欠損している。1はやや砂質の胎土、2は緻密な胎土で断面はにぶい赤褐色を呈する。1、2ともに東金子窯跡の製品。



第27図 遺構外出土遺物実測図（S=1/3）

第6表 遺構外出土遺物観察表

挿図番号	出土遺構	種別	器種	部位	残存率 (%)	法量 (cm) 口径 器高 底径	重量 (g)	成形・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
27-1	表土 12-遺構外-1	須恵器	蓋	傘部	10	— <2.0> —	79.4	ロクロ成形、頂部回転ヘラケズリ、摘み欠損	長石、白色粒子、黒色粒子	良好	外面：黄灰色 (2.5Y6/2) 内面：灰黄色 (2.5Y6/1)	東金子産
27-2												
27-2	表土 12-遺構外-2	須恵器	蓋	傘部	5以下	— <1.5> —	47.4	ロクロ成形、頂部回転ヘラケズリ、摘み欠損	長石、白色粒子	良好	外面：灰黄褐色 (10YR5/2) 内面：暗灰黄色 (2.5Y5/2) 断面：にぶい赤褐色 (5YR5/4)	東金子産

第7表 遺構観察表

※ S I : 竪穴建物跡 S X : 周溝状遺構 S Y : 溝状遺構 S K : 土坑 S P : ビット P : 遺構内ビット () 付きは推定値を示す

遺構名	検出グリッド	遺構種別 平面形状	確認標高 (m)	規模 (m)			掘方 深さ	下端標高 (m)	掘方下端 標高 (m)	出土遺物	推定 年代	備考
				長軸	短軸	深さ						
SI01		竪穴建物跡 (隅丸方形?)	2.32	(4.30)	(3.86)	0.17	0.17	2.32	2.15	土師器	古墳 時代 前期	主軸方位N-41°-W, 1/5 残存, 攪乱により部分的な 検出
P1	E2・F2	小穴 円形	2.18	0.20	0.19	0.21		1.97		-	-	支柱穴
P2		小穴 円形	2.31	0.27	0.23	0.10		2.21		-	-	
貯蔵穴		貯蔵穴 円形	2.28	0.49	(0.42)	0.15		2.13		土師器	-	
SX01	A2・A3 B2・B3 C2	周溝状遺構 溝状	2.35	(9.00)	(1.30)	0.80		1.55		土師器	古墳 時代 前期	主軸方位N-86°-W, SY01より古, 西側調査区外に 延びる
SX02	C2・C3・ C4 D2・D3	周溝状遺構 溝状	2.40	15.50	(8.20)	0.69		1.71		土師器	古墳 時代 前期	主軸方位N-27°-E, 南側調査区外に延びる, 略完形 壺形土器2個体出土
P1	E2・E3 F3・F4	小穴 円形	1.95	0.25	0.25	0.13		1.82		-	-	
SY01		溝状遺構 溝状	2.34	(11.00)	3.60 ~ 4.10	1.02		1.32		土師器 須恵器 灰軸陶器	平安 時代	主軸方位N-7°-W→N-43.5°-E, SX01より新, 南北調査区外に延びる, 南側が深く掘り込まれている, 深さ0.51~1.02m
P1		小穴 円形	1.98	0.25	0.24	0.29		1.69		-	-	
P2		小穴 楕円形	1.95	0.25	0.24	0.30		1.65		-	-	
P3		小穴 楕円形	1.96	0.24	0.21	0.20		1.76		-	-	SY01の中間層から掘り込む, 焼土・炭化物を多く含む
P4		小穴 楕円形	2.02	0.28	0.25	0.51		1.51		土師器	-	
P5	B2・B3・ B4 C2・C3	小穴 円形	1.89	0.23	0.21	0.35		1.54		-	-	SX01より新
P6		小穴 円形	2.01	0.19	0.18	0.15		1.86		-	-	
P7		小穴 楕円形	1.97	0.28	0.19	0.18		1.79		-	-	
P8		小穴 楕円形	1.88	0.29	0.19	0.32		1.56		-	-	
P9		小穴 楕円形	1.85	0.28	0.16	0.22		1.63		土師器	-	
P10		小穴 楕円形	1.78	0.24	0.20	0.20		1.58		-	-	
P11		小穴 円形	1.95	0.21	0.20	0.08		1.87		-	-	
P12		小穴 楕円形	1.96	0.38	0.21	0.33		1.63		-	-	
SK01	C3	土坑 楕円形	2.40	0.69	0.60	0.20		2.20		-	不明	主軸方位N-8°-W, SK02よりも新
SK02	C3	土坑 楕円形	2.40	0.59	0.55	0.17		2.23		-	不明	主軸方位N-80°-E, 坑底東側に径20cm、深さ17cmのビットを持つ
SP01	C2・C3	小穴 楕円形	2.32	0.33	0.28	0.36		1.96		-	不明	主軸方位N-7°-W
SP02	C3	小穴 楕円形	2.35	0.42	0.30	0.39		1.96		-	不明	主軸方位N-24°-E, 北側を攪乱で消失
SP03	C3	小穴 楕円形	2.40	0.37	0.25	0.19		2.21		-	不明	主軸方位N-78°-E
SP04	C4	小穴 円形	2.26	0.25	0.20	0.43		1.83		-	不明	主軸方位N-67°-E
SP05	D2	小穴 円形	2.39	0.39	0.31	0.22		2.17		-	不明	主軸方位N-47°-E

第8表 遺物集計表

遺構名	土師器		須恵器		灰軸陶器		礫・礫片		その他(土塊)		総点数	総重量(g)
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)		
SI01	14	54.4									14	54.4
SX01	3	36.1									3	36.1
SX02	409	6,145.5					1	3.0	2	4.9	412	6,153.4
SY01	242	783.3	31	399.3	7	136.7	1	2.8	1	6.0	282	1,328.1
表土	12	139.8	4	140.1							16	279.9
小計	680	7,159.1	35	539.4	7	136.7	2	5.8	3	10.9	727	7,851.9

第7章 まとめ

今回の発掘調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒、周溝状遺構2基、平安時代の溝状遺構1条、時期不明の土坑2基、ピット5基を検出した。以下に、時代ごとに今回の発掘調査の成果について述べる。

1 古墳時代前期の遺構と遺物

第1号竪穴建物跡は、調査地北壁際で検出した。攪乱によりほとんど壊されており、北側は調査地外に延びている。平面は隅丸方形を呈する形態と考えられ、主軸は北西である。南原遺跡では、本調査を含めると古墳時代前期の竪穴建物跡が76軒確認され、報告書が刊行されていない第8次調査を含めると100軒以上の竪穴建物跡が確認されている。竪穴建物跡は方形もしくは隅丸方形を呈し、主軸は北西・北東を軸にするものが多く、第1号竪穴建物跡も南原遺跡で検出されたものと同じ形態である。

周溝状遺構は2基検出した。第1号周溝状遺構は調査地西側で確認し、西側は攪乱で壊され、北溝は調査地外となるため南溝のみ検出した。南溝はほぼ直線であり、東側開口部付近でやや膨らむ。平面は開口部を東に持つ、コの字状を呈する。遺物が少ないため、時期の比定は難しいが折り返し口縁を持つ無文の土器が出土しているため、古墳時代前期とみられる。市内で検出された周溝状遺構の開口部は、南東側もしくは南西側に持つものがほとんどであり、東側にする周溝状遺構は少ない。南原遺跡でも、第1次調査方形周溝墓（塩野1969）、第6次調査第1号方形周溝墓（小島1996）が該当するのみである。このうち第6次調査第1号方形周溝墓は、平面が本遺構と同じのコの字を呈する。出土遺物は折り返し口縁の無文壺のほかに、口縁部に棒状浮文と縄文を施文する壺が出土しているため、比田井克仁（比田井2001）による編年（以下、比田井編年とする）の古墳時代前期Ⅰ段階ごろと考えられ、本遺構についても同時期の可能性がある。

第2号周溝状遺構は、調査地東側から中央にかけて検出し、全体の半分ほどを検出した。南側は調査地外に延びている。各溝は直線的で、北西・北東部分は直角に曲がる。出土遺物は、東溝の南壁際から略完形の壺が2個体出土している。壺1（第16図1）は折り返し口縁を持ち、無文で胴部上半は球胴化しているが最大径が胴部下部分につき全体的には下膨れ型のものである。壺2（第16図2）も折り返し口縁をもち、無文で胴部は球胴化している。底部は意図的に穿孔している可能性がある。

いずれも文様がなく、胴部が球胴化している点から比田井編年の古墳時代前期Ⅱ段階に該当すると思われる。また、本遺構は同時代遺構との切り合いがないことや、底部穿孔の壺が出土しているため、方形周溝墓の可能性が高い。

南原遺跡では、本調査を含めて31基の周溝状遺構が検出されているが、性格が分かる遺構はほとんどない。その中で方形周溝墓の可能性が高い遺構として、焼成後底部穿孔された壺が出土した第1次調査方形周溝墓、第8・9次調査第3号周溝墓（早田ほか2010）、第12次調査第1号方形周溝墓（岩井ほか2016）があげられる。このうち第8・9次調査、第12次調査のものはいずれも長軸が20m

以上であり、他の周溝状遺構と比較しても大型の遺構である。出土遺物が少なく、時期の比定が難しいが、古墳時代前期の竪穴建物跡を切って構築されているため、比田井編年の古墳前期Ⅲ段階から古墳時代中期前半のものと考えられ、第12次調査第1号方形周溝墓、第8・9次調査第3号周溝墓の順で築造されたと思われる。

南原遺跡の北にある鍛冶谷・新田口遺跡でも財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（西口ほか1986）の第7号・第74号方形周溝墓のように長軸が20m以上の方形周溝墓が確認されている。南原遺跡と同様に古墳前期Ⅲ段階以降の築造と考えられ、各集落で大型方形周溝墓を築造する有力者が同時期に生まれた可能性がある。

本調査の第2号周溝状遺構は、上記の大型方形周溝墓と比較すると小ぶりで築造時期も1段階ほど古いものであるが、同時期の方形周溝墓と比較すると最大級のものであり、有力者層の台頭という古墳時代後期に繋がる要素がこの段階から現れたと考えられる。

2 平安時代の遺構と遺物

本次の調査では、溝状遺構1条を検出した。第1号溝状遺構は調査地西側で検出し、第2号周溝状遺構を囲むように南壁から弧を描き北壁に至る。検出した長さは11m、上幅は南端で4.1m、北端で3.6m、深さは南側で1.02m、北側で0.57mとなる。断面は、西側は緩やかで東側は垂直気味に立ち上がる。遺構内には12基のピットを検出し、一部のピットは柱穴の可能性もある。出土遺物は、古墳時代前期の壺や平安時代の灰釉陶器などが中層から上層にかけて出土した。遺物の出土状況から、9世紀後半頃には埋没したと考えられる。

第1号溝状遺構と平面形状が近似する遺構としては南原遺跡第12次調査の第7号溝状遺構があげられる。調査地南壁から弧を描き第1号方形周溝墓を囲むように東壁に至る。溝内部にはピット9基を検出し、一部は柱穴の可能性もある。出土遺物としては、縄文土器、古墳時代後期の埴輪、平安時代の須恵器坏などが出土している。遺物の多くは古墳時代前期の竪穴建物跡・溝状遺構、古墳時代後期の古墳、平安時代の溝状遺構と激しく切り合う地点から出土しているため、出土遺物から時期を確定することは難しく、報告書でも平安時代に埋没したとしている。また、第7号溝状遺構が第1号方形周溝墓と重複しないため、溝を掘削する際に、第1号方形周溝墓を認識していた可能性が指摘されている。ただし、調査報告書の土層断面では、第1号方形周溝墓を切っており、方形周溝墓の埋没後に構築されることになっている。そのため第1号方形周溝墓との関係については、更に精査していく必要がある。

また、南原遺跡第6次調査で検出した古墳時代後期の第1号円形周溝墓（南原5号墳）のように、周溝底部から同時期の略完形の壺が出土している一方で、遺構上層からは9世紀の須恵器坏が多く出土する古墳も確認されている。南原遺跡では、6世紀中頃から後半の第1次調査の古墳（南原1号墳）以降、遺構が確認できなくなり集落が移動もしくは廃絶したと思われる。次に遺構が確認できるのは第10次調査（赤熊2012）の8世紀末から9世紀初頭頃の第3号住居跡となり、これ以降に遺構・遺物が増加しており、集落が再び形成されることになる。

このように、南原遺跡には古墳時代の遺構であっても、平安時代の開発状況の影響を強く受けた遺

構もあるため、第1号溝状遺構も本報告では平安時代の溝状遺構とするが、古墳時代後期の古墳、もしくは第2号周溝状遺構に関連する遺構の可能性を含めさらに検討していく必要がある。

3 結語

以上のように本調査では、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒、周溝状遺構2基、平安時代の溝状遺構1条を検出した。

調査地周辺は、北側は菖蒲川が東流し、かつては一帯が沼地であった場所とされ、また西側は第13次調査（岩井ほか2015）で古墳時代前期の竪穴建物跡・周溝状遺構を確認している。しかし、第13次調査の東側は遺構が検出されない微低地であるため、南原遺跡の中心集落とは異なる微高地に位置した集落であった。そのため本調査地は、古墳時代前期における南原遺跡の北西端にあたる地域であり、遺構の切り合い関係が少ない要因として、集落の周辺部に位置していたためと考えられる。

南原遺跡では古墳時代前期後半に居住地から墓域へと土地利用が変遷していくことが指摘されているが、今回の調査により古墳時代前期中頃の段階から土地利用の変遷が始まっており、周辺から中心部に向けて墓域が拡大していく様相を明らかにすることができた。

引用・参考文献

- 赤熊浩一 2012『南原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第396集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 岩井聖悟・坂上直嗣・山崎裕子
2013『南原遺跡XI』戸田市文化財調査報告XVIII 戸田市教育委員会
- 岩井聖悟・若松良一
2015「付編 南原遺跡第8次発掘調査出土の埴輪について」『前谷遺跡IV』戸田市文化財調査報告XX 戸田市教育委員会
- 岩井聖悟・諸星良一
2015『南原遺跡XIII』戸田市文化財調査報告XXII 戸田市教育委員会
- 岩井聖悟・柏山滋・宅間清公
2016『南原遺跡XII』戸田市文化財調査報告XXV 戸田市教育委員会
- 長澤有史 2017『南原遺跡VII』戸田市文化財調査報告XXVI 戸田市教育委員会
- 小島清一 1991『南原遺跡V』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第3集 戸田市遺跡調査会
- 小島清一 1996『南原遺跡VI』埼玉県戸田市遺跡調査会報告書第5集 戸田市遺跡調査会
- 塩野 博 1969『南原(高知原)遺跡第1次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告III 戸田市教育委員会
- 塩野 博 1972『南原(高知原)遺跡第2・3次発掘調査概要』戸田市文化財調査報告V 戸田市教育委員会
- 早田利宏・河野一也・井 博幸
2010『南原遺跡IX』戸田市文化財調査報告XVII 株式会社プロネクサス・大成エンジニアリング株式会社・戸田市教育委員会
- 福田 聖 2014『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房
- 比田井克仁 2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
- 西口正純ほか
1986『鍛冶谷・新田口遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告第62集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 古代の入間を考える会
2013『古代入間の土器と遺跡(Ⅱ)―須恵器坏の編年(9・10世紀)―』古代の入間を考える会
- 尾野善裕 2001「「戊申年木簡」・尾張国分寺と猿投窯―猿投窯系須恵器編年の再構築・補論―」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 補遺・論考編 東海土器研究会
- 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅』第5分冊 補遺・論考編 東海土器研究会
- 鶴間正昭 2019『律令国家形成期の土器様相』六一書房

写真図版



1 調査区全体（上空より）



1 第2号周溝状遺構遺物出土状況（南西から）



2 第2号周溝状遺構遺物出土状況（北西から）



1 テストピット1断面



2 テストピット2断面



3 第1号竪穴建物跡完掘 (南東から)



4 第1号竪穴建物跡貯蔵穴完掘 (南から)



5 第1号竪穴建物跡ピット1完掘 (南から)



6 第1号周溝状遺構完掘 (上空から)



7 第1号周溝状遺構A断面 (南から)



8 第1号周溝状遺構B断面 (東から)



1 第2号周溝状遺構（上空から）



2 第2号周溝状遺構F断面（北東から）



3 第2号周溝状遺構D断面（南西から）



4 第2号周溝状遺構C断面（南西から）



5 第2号周溝状遺構B断面（南東から）



1 第2号周溝状遺構A断面（北東から）



2 第2号周溝状遺構E断面（北東から）



3 第2号周溝状遺構ピット1断面（南から）



4 第2号周溝状遺構ピット1完掘（南から）



5 第1号溝状遺構C断面（北から）



6 第1号溝状遺構B断面（南から）



7 第1号溝状遺構A断面（南から）



8 第1号溝状遺構D断面（南から）



1 第1号溝状遺構遺物出土状況（南西から）



2 第1号溝状遺構遺物出土状況（東から）



3 第1号溝状遺構遺物出土状況（南西から）



4 第1号溝状遺構遺物出土状況（南東から）



5 第1号溝状遺構ピット1断面（南から）



6 第1号溝状遺構ピット1完掘（南から）



7 第1号溝状遺構ピット3断面（東から）



8 第1号溝状遺構ピット3完掘（東から）



1 第1号溝状遺構ピット5断面（南西から）



2 第1号溝状遺構ピット5完掘（南西から）



3 第1号溝状遺構ピット10断面（南から）



4 第1号溝状遺構ピット10完掘（南東から）



5 第1・2号土坑断面（西から）



6 第1・2号土坑完掘（西から）



7 第1号ピット断面（南西から）



8 第1号ピット完掘（南西から）



1 第2号ピット断面（西から）



2 第2号ピット完掘（西から）



3 第3号ピット断面（南から）



4 第3号ピット完掘（南から）



5 第4号ピット断面（南から）



6 第4号ピット完掘（南から）



7 第5号ピット断面（南東から）



8 第5号ピット完掘（南から）



1 調査開始前（北東から）



2 西側調査区表土掘削（北西から）



3 西側調査区埋め戻し（西から）



4 調査風景①



5 東側調査区表土掘削（北から）



6 東側調査区埋め戻し（東から）



7 調査風景②



8 調査終了後（北東から）



第1号住居跡出土遺物



第1号周溝状遺構出土遺物



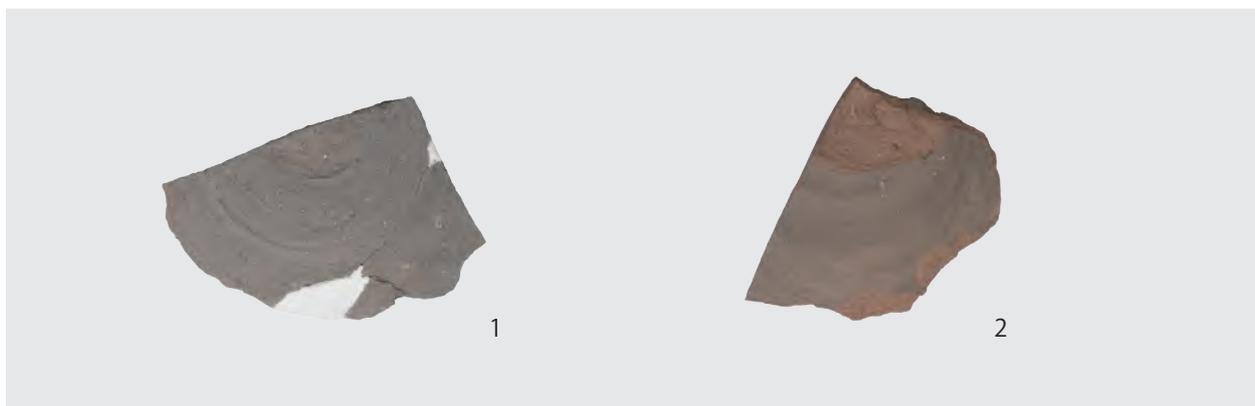
第2号周溝状遺構出土遺物(1)



第2号周溝状遺構出土遺物(2)



第1号溝状遺構出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	みなみはらいせきじゅうよん まいぞうぶんかざいはくつちょうさほうこくしょ							
書名	南原遺跡XIV 埋蔵文化財発掘調査報告書							
副書名								
シリーズ名	戸田市文化財調査報告							
シリーズ番号	36							
編著者名	今井源吾 根本靖							
編集機関	戸田市教育委員会 株式会社中野技術							
所在地	〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 TEL 048(441)1800							
発行年月日	2024(令和6)年1月26日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
みなみはらいせき 南原遺跡	とだしみなみちよう 戸田市南町2297番3	11224	06-002	35° 48' 20"	139° 40' 18"	2023.03.27 ~ 2023.05.02	348.00	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
南原遺跡	集落跡	古墳時代前期 平安時代	竪穴建物跡 1軒 周溝状遺構 2基 溝状遺構 1条 土坑 2基 ピット 5基	土師器 須恵器 灰釉陶器		・周溝状遺構1基は方形 周溝墓の可能性がある。		
要約	<p>本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である南原遺跡の範囲に属し、JR埼京線戸田公園駅から南西に約610mの戸田市南町2297-3に位置する。</p> <p>南原遺跡は、利根川や荒川・入間川等によって形成された平坦な沖積地（荒川低地）の左岸に分布する微高地に立地している。</p> <p>調査の結果、古墳時代前期の竪穴建物跡1軒、周溝状遺構1基、方形周溝墓に推定される周溝状遺構1基、平安時代の溝状遺構1条、時期不明の土坑2基、ピット5基を検出した。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土した。</p> <p>方形周溝墓と推定される周溝状遺構から略完形の壺形土器2個体が出土した。平安時代の溝状遺構は周溝状遺構（方形周溝墓）の周りを巡るような位置で検出された。</p>							

南原遺跡 XIV

埋蔵文化財発掘調査報告書

発	行	埼玉県戸田市教育委員会 〒335-8588 埼玉県戸田市上戸田1-18-1 TEL 048(441)1800
編	集	株式会社中野技術 〒352-0011 埼玉県新座市野火止3-8-7
印	刷	朝日印刷工業株式会社 〒371-0846 群馬県前橋市元総社町67番地
発	行	日 令和6年1月26日